

---

# 魔王サマの専用食

辰魅シホ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔王サマの専用食

### 【Nコード】

N1454BA

### 【作者名】

辰魅シホ

### 【あらすじ】

本を読むことをこよなく愛する女子高生、美夜みやが迷い込んだのは、ヒトと魔物が対立する異世界だった。そこで出会ったのは、ヒトの生気を食料とする自称魔王サマで、？ 命を狙われ、魔王にファーストキスを奪われた上に専用食として連れ回されながらも、美夜は元の世界へ戻るために奮闘する。シリアスだったりそうじゃなかったりする、異世界恋愛ファンタジー。

## 1 不思議な本

空が朱色に装いを変える放課後。

窓越しに聞こえる運動部の掛け声に耳を傾けながら、私は目の前に並ぶ文字の羅列に視線を巡らせていた。

「世界の童話全集……ふむふむ、このスペースは外国文学が中心なんだな……」

いつの間にか鼻歌なんて歌いながら、私は順々に本棚に並んでいる本の背表紙に目を通して行く。  
が、

「なあ美夜<sup>みせ</sup>、今日はもう遅いし帰らないか？」

下方から唐突に掛けられた声に、その作業は中断させられた。

折角集中していたのにと半ば不服に思いつつ、私は木製の梯子はしごから落ちないように注意しながら声のした方を振り返る。

自分より人一人分低い位置。そこで帰り支度を整えた一人の男子生徒<sup>みや</sup>が、呆れたような面持ちで私を見上げていた。クラスメイトの宮野<sup>みやの</sup>恭平<sup>きょうへい</sup>だ。

「やだ！ まだここの学校の図書室の本、全部把握してないもん。私は最終下校時刻までここにいますつもりだから、恭平は先に帰って

なよ」

そう言つて、私は再び目の前の本棚に視線を戻す。

恭平の返事は無い。が、数秒の間の後、椅子が引かれる音と荷物が床へ下ろされる音が聞こえた。

この図書室には私と恭平と、かなり距離が離れたカウンターで居眠りをしている初老の司書さんしかない。たぶん恭平が生徒の読書の備え付けの椅子へ腰掛けたのだろう。

もしかして最終下校時刻まで私を待つつもりなのだろうか。あと一時間以上はあるというのに……難儀なことだ。

恭平とは小、中、高と全て同じ学校だ。……いや、幼稚園からずっと一緒。俗に言う” 幼馴染 ” というやつ。

家も近いし昔から何かと一緒にいる事が多いけど……高校生にもなつて、わざわざ登下校を共にしなくてもいいと思う。現に今日も、教室で別れたはずの恭平がこの図書室まで迎えに来ているし。別に約束をしていた訳でもないのに。

昔からこれが日常化してしまつているのもあるけれど、恭平が鈍すぎるのも大きな原因な気がする。

恭平は幼い頃から嫌というほど顔を合わせている私から見ても、結構な美形だ。性格は鈍感な所を除けばは人懐こくて明るいし、成績も良く、加えて運動神経まで良い。当然ながらモテる。かなりモテる。

そんな奴が、私のような平々凡々な女子と毎日行動を共にしていると、色々と困るのだ。ほら……ね？女子って怖いから。

そのお陰で中学時代には色々あった。だから高校こそはと思つていたのに、どういっわけか、気付いたら同じ学校へ入学していた。加えて同じクラスというね！

学力的にも恭平だつたらもっと上の学校を狙えたはずなのに……W

hy? ナゼ?? 当時も今も、その疑問は未だに私の頭の中に巣食っている。

まあ来月から部活の体験入部が始まるから、恭平も何かしらの部に入って行動を共にする機会も少なくなるだろう。現に数日前から教室にはひっきりなしに先輩達が恭平をわが部へ引き入れようと、部活動の勧誘にやって来ているし。

そんな事を考えながら、私は目の前の本棚へ視線をくばせる。

高校見学の際に訪れたこの図書室が魅力的だったというのも、この学校へ入学した理由の一つだ。特別設備が充実しているわけではないけれど、とにかく多いのだ。量が。何でもこの学校の何代目かの校長がとんでもない本の虫で、世界各国のあらゆる本を我が手元へ取り寄せたらしい。うーん、名前も顔も知らないけれど、何て素晴らしい人だろう。

けれど折角のこの宝の山を、この高校の現代っ子たちは無にしているのが現状だ。そうとなれば私がこの宝を全て頂いちゃおうじゃないか!

というわけでこの学校へ入学してからというもの、放課後はほぼ毎日、私はこの図書室に通いつめている。ブースごとに本を確認しては、大方読みたい本をピックアップしていくのが日課。いつか全ての本を制覇するのが目標だ。

気が遠くなるようなことかもしれないけど、カビ臭い古紙特有の匂いに包まれながら、ずらりと並んだ本の背表紙を眺めていると、何とも言えない満悦感に浸れて楽しいのだ。恭平が言うに、” 奇怪な趣味 ” らしいけれど。

「……………ん?」

梯子を一段上り、本棚の最上段へ視線を移すと、私は我知らず首を傾げた。

自分の目がおかしいのだろうか。

規則的に並べられた本達の向こう側。最上段の棚の奥の一部が、ぼんやりと黄金色に光って見えるのだ。

一度目を擦り、再び目の前を見やるが、やはり変わらず光っている。誰かが携帯でも落としたのかな？ もしくは火災警報ランプか何かだろうか？

とにかく確認してみないことには何も分からない。

私は恐る恐る光っている部分の手前の本を取り出す。そして思わず息を呑んだ。

本が……光ってる……？

黄金色の光を発していたのは、携帯でもランプでもなく、一冊の本だった。

手前の本達に隠れるようにして、真っ暗な棚の奥に一冊、ひっそりと収められている。

これ、触っても大丈夫だよな……？

半ば信じられない気持で私は棚の奥へ手を伸ばし、輝く本を取り出した。

本はそれ程厚みはなく、漫画本一冊程度だ。

「戦乙女ヴェロニカ……」

それが本の題名だ。未だ輝く表紙には、剣を持った綺麗な女の人の姿が描かれている。

梯子から下りると、椅子に座っていた恭平が歩み寄って来た。

「良い本が見つかったのか？」

「あ、ううん。ほら、光ってるでしょ？ この本。何か特殊な加工でもされてるのかなあって」

「？ これのどこが光ってた？ 普通の本じゃん」

私が差し出した本をしげしげと見た後、恭平は首を傾げた。何言ってるんだコイツという表情で。

しかし【戦乙女ヴェロニカ】は未だ私の両手の間で輝き続けている。恭平にはこの光が見えていないのだろうか？  
もしくは、私の目が本当におかしくなったか

釈然としないまま、取り敢えず私はパラパラと本のページを捲ってみた。

字数は多くなく、軽く目を通すだけで内容が頭に入ってくる。加えて所々挿絵が入っている為、浅い文面ながらも情景がすぐに頭に浮かんだ。

物語の内容はよくある冒険活劇だ。

主人公ヴェロニカは女性にも関わらず鎧を身に纏い、剣を手にし、

魔王討伐へ繰り出す。

その最中出会う異国の勇者と恋に落ち、共に魔王を封印してめでたしめでたし。

何も特出する部分はないし、価値がある本のようにも見えない。なら、どうしてこれが光って見えるのだろう。

いよいよ病院へ行った方がいいかな等本気で考えながら、最後のページへ目をやる。

そして、私は思わず首を捻った。

最後のページに、文字は無かった。

代わりに封印された魔王の挿絵が、ページいっぱい描かれていた。

「……変だね。明らかにハッピーエンドなのにこの物語の流れだと、最後結ばれた二人の絵があるのが普通なのに……。どうして悪役の亡骸を、こんな1ページまるまる使って描いてあるんだろう？」

「さあ？ ……あれじゃね？ ホラー映画みたくラストを暗くして、話に余暇を持たせるみたいなの」

「うーん……そうかなあ……」

「美夜は深く考えすぎだって。ほら、もう帰ろう？ いい加減満足しただろ？」

私は「んー……」と生返事をしながら、荷物を持ち上げる恭平に歩み寄る。

だが、やっぱりラスト1ページから視線を外せない。

場所は閑散とした荒野だ。ページのだ真ん中に巨大な石柱が無造作に建てられ、空はどんよりとした鈍色に染まり、一層陰気な雰囲気

を演出している。肝心の魔王は熊を2倍のサイズにしたようなごつい大男で、しかし全身が黒く塗り潰されている為、その風貌は分からない。その魔王が真っ白な石柱に何重にも鎖で巻かれ、縛り付けられている。

魔王の白い瞳と、血と思しき紅色が、真っ黒な図体に不思議と映えていた。

なんか変に引き込まれる絵だなあ……。

そう思ったその時だ。

「!?!」

突然ページが光を放った。

先程までのぼんやりとした光ではない。カメラのフラッシュのような、もつと強い閃光だ。

あまりの眩しさに私は思わず本を手放した。床に落ちても、本からの光が収まる事はない。

「な、なんだ!?! この光ッ

」

恭平にもこの光は見えるようだ。

この光といい、本といい、色々と訳が分からない。私は夢でも見ているのだろうか。眠った記憶は、ないけれど。

混乱しながらも、直感的に今の状況はヤバい気がした。恭平に一旦本から離れようと提案し掛ける。が、

「きゃあああ!？」

「!？ 美夜!？」

突然身体が本の方へ、ものすごい力で引っ張られた。そりやもう巨大掃除機が何かに勢い良く吸い込まれるような、そんな現実離れした強さで。

私は慌てて恭平の方へ手を伸ばし、助けを求める。しかし本へ引かれる力の方が強く、互いの指先を掠めるだけで終わる。それから視界が徐々に光に包まれて

瞠目しながら手を伸ばす恭平の姿を最後に、私の意識はそこで途切れた。

## 2 まさかの異世界

泥沼に沈んでいるように、頭の中が重い。  
貧血時の寝起きのようだ。

あれ……？ 私、いつの間に寝たんだけ？

ちがう。寝てなんかいない。

確か……そうだ。

放課後私は恭平と図書室にいて、それから変な本が突然光って

いつの間にか気絶、してたみたいだ……。

気絶なんて、常時健康体の自分にとっては、生まれて初めての経験だ。

重い瞼を開き、目を擦りながらおぼろげな視界で私は周囲の状況を確認する。

「……………え？」

次の瞬間、私は反射的に勢い良く起き上がった。

ここ、どこ!?

学校の図書室ではない。絶対。

私は屋外にいた。

腿に感じるのは冷たい砂の感触。周囲を見回せば、自分を取り囲んで高く聳える木々が確認出来た。そのまま首を上へ擡げると、蜘蛛の巣のように張り巡らされた木の枝達の向こう側に、満天の星空が見える。

冷たい夜風が頬を撫で、一瞬で掻いた汗を一気に冷やしていく。

「きよ、きよーへー……?」

姿が見当たらない幼馴染の名を呼ぶが、当然返事はない。

何度も目を擦って頬をつねり、周囲を見回すが、やはり景色は変わらない。

私は、完全に見ず知らずの森の中にへたり込んでいた。

ど、ど、ど、ど、ど……。

状況が全く把握出来ず、私は暫くその場で呆ける。

そして、ある事に気付いた。

私、学校指定の上履きのままだ。

これはおかしい。

屋外でどうして上履きのままなのだろう。靴の裏に泥も付いていないし……歩いてこの森まで来たというわけも無さそうだ。

まさか図書室からこの森へワープしたとか……。

有り得ない予想をして、私は慌ててかぶりを振る。

そんな小説の中のような事、ある訳がないじゃないか。うんうんと一人で頷き、立ち上がる。

とにかく、このままこうしててもしょうがない！

森の中だし、下手したら遭難だって有り得る。女子高生白骨化遺体発見の記事に載るつもりはさらさらない。

まずは森から出ないと。細かい事はそれからだ。

気合を入れて私は森の中を進む。

日はとつぷりと沈んでいるけれど、幸い空から月明かりが射しこんでいるし、視界は悪くない。木が青白く見えるのは……不気味だけど。それでも真っ暗闇じゃなくてよかったと思う。

けれど今いるここは住宅街や市街地とは違う、夜の森。ろくに防寒具も身に付けていない、セーラー服だけのこの身なりではかなり寒い。両手で自らの二の腕を摩りながら鼻を噉る。

本当に、一体何だというのだろう。

気を失っている間に、誰かにこの森へ連れてこられたとか？ ……

いや、だったらあの本の光に説明がつかない。仮にそうだとしても、校内の図書室から気を失った私をどうやって人目を憚らず連れ出せ

るといふんだ。第一平凡な一般ピーポーである私を誘拐する利益もないし

そんなことを考えながら5分程道なりに沿って歩いてみると、木々の間に灯りが見えた。赤い点が数個、ゆらゆらと動いて見える。

人だっ！！

瞬間、私は走り出していた。

大して怖い思いもしていないし、人からは神経がズ太いなどと言われる私だけど、こんな夜の森の中で1人というのはやはり心細い。

何より一刻も早くこのワケの分からない状況から抜け出して、あつたかい我が家へ帰りたかった。

木の間を縫うように、灯り目指してひたすら走る。

徐々に点のようだった灯りが大きく見えてきて

「あ のっ！ すみませ」

私は固まった。

人だ。確かに人がいた。男性2人、女性2人。彼らも突然現れた私を見て、驚いたような表情で固まっている。

問題は彼らの格好だ。

世界史の教科書で見るとような……そう、中世ヨーロッパの農民のよ  
うな服を身に纏っていた。

顔は彫が深く、髪色や瞳の色も日本人とは全く違う。茶色や緑や青

色だ。

加えて今の文明に反して、彼らが灯り取りのために手にしているのは赤々と燃え盛る松明たいまつ。パチパチと木の弾ける軽やかな音が、気まずい謎の沈黙の中に響いている。

えっと……日本語、通じるのかな？

どうして外人が日本の森にいるのかなど、内心疑問だらけだが、この人達を逃したらもう誰にも出会えないかもしれない。白骨化はご免だ！

「え、えくすきゅーずm」

「司祭様あああああ！　　預言の娘が現れましたああアアアアア！  
！」

私の渾身の实用英語は、小太りの男性の叫び声に掻き消されてしまった。

っていうか、日本語喋ってんじゃん。くそっ、私の緊張返せよ！

内心悪態を吐いていると、4人の人達の向こう側から草木を掻き分ける音が聞こえた。数秒の間後、現れた人物の容姿に私は思わず息を呑む。

き、金髪……！？

木々の間から現れたのは、またもや3人の外国人だった。

一番手前にいるのは地毛であろう金色のブロードヘアを、襟足の辺りまで伸ばした男性。歳は20代前半くらいだろうか。一見女性と勘違いしてしまいそうな、眼鼻立ちが整ったかなりの美形だ。思わず見惚れてしまいそうになる。

その彼の後ろに控えているのが、つるつぱゲ……というか、波ハゲの初老の男性2人。1人は小太りでもう1人は骸骨のようにガリガリだ。何て言うか……頭の輝きだけが印象的な2人だ。

3人も揃いの真っ白なローブと、足首まで丈がある高価そうな白い浴衣のような服を着ている。教会関係者が何かだろうか。

ハゲコンビは私と視線が合うと、「ひいッ」と短い悲鳴を上げ、怯える様な素振りを見せた。人の顔を見るなり顔を青くするなんて、失礼なオヤジ達だ。

しかしよく見ると、最初に出会った人達もちらちらと私を見ては何かを耳打ちし合っている。

なに？ 私、何か変かな？

確かに外人8人の中に日本人1人が紛れていれば、それは異質な光景だと思う。けれど彼らの怯え方は、明らかに普通じゃない。

居心地の悪い気分で彼らの様子を窺っていると、金髪美男子がこちらへ歩み寄って来た。

日本語を話していたとは言え、やはり外人相手だ。本能的に身構えてしまう。

「貴様、異界の者か？」

「……は？」

言っている意味が分からず首を傾げると、ぐい、と突然目の前の彼に襟首を掴まれた。

ちよ、ちよつとちよつと！？ か弱い女子高生の襟首掴むなんて、どこのチンピラだよ！ 金髪美男子から金髪野郎に格下げだこの兄ちゃんめ！

「異界から来たのか、と聞いている」

「異界……？」

至近距離で再度尋ねられても、やはり言っている意味が分からない。だって異国ならともかく、”異界”って。訳が分からなかつたけれど、金髪野郎に威圧的に見下ろされ、私は仕方なしに事実を述べる。

「私は、東京都から来ました」

「……トーキョート？ 聞いた事がないな」

あれ？ それなら国名か？

「すみません、勘違いしてました。日本……ええと、ジャパンから来ました」

「……ニホンという国も、ジャパンという国も初めて聞く」  
「う、うそ!? あ! アメリカなら知ってますよね? ゆないてつどすていつおぶあめりか!」  
「知らん」  
「じゃあ地球! あーす!! あーすは!?!」  
「知らんな」

思考が停止する。

日本を知らない……というのも今の時代ほぼ有り得ないけど、まさか地球を知らないなんて……嘘でしょ?  
外人さん達がグルになって私を騙そうとしているとか?  
……いや、それにしても彼らの服装とか、光る本とか、あまりにも手が込み過ぎている。第一ただの女子高生且つ一般人である私が、ここまで大掛かりなドッキリを仕掛けられる訳がない。  
それなら

私の中で、一つの可能性が浮かんだ。

幾度か本で読んだ、信じ難いし、絶対に有り得ない可能性が。

頭に浮かんだ嫌な予感に顔を強張らせる私を数秒程見やった後、金髪野郎は静かに言い放った。

「セリナージャ」。この世界は、そう呼ばれている

嘘だと、夢だと信じたい。

可能性が、的中してしまった。

### 3 突拍子すぎる展開

” 異世界トリップ ”。

そんな言葉が脳裏に浮かんだ。と同時に頭の芯の辺りがジンと痛くなる。

そのような内容の小説は読んだ事があるし、今自分が置かれているこのおかしな状況も、その一言で全て説明がつく。

けど、まさか自分の身に起こるなんて思えないし、あまりにも話が突拍子すぎて頭の片隅では未だ今のこの状況が夢か何かではないかと疑っている。

「もう一度聞くんが、貴様は異界から来たんだな？」

「……はあ……信じたくないけど……」

金髪野郎のせいにくしゃくしゃになってしまった制服の胸元を直しながら、私は渋々答える。

どうしてこの男は私が異界から来た事に固執するのだろう。さっきも異界から来たのか等、やけにしつこく訊いてきたし。

確かに異世界人が突然現れるなんて、普通に考えたら大事件だけどさ。

「ん？」

両腕に感じた違和感に、私は金髪野郎から視線を外す。

いつの間にか両サイドにハゲコンビがいた。何やらいそいそと、私の両手首を後ろで縄か何かで縛り始めている。

なんだこれ。これではまるで、凶悪犯現行犯逮捕の瞬間じゃないか。突然の彼らの行動を理解出来ず、私は取り敢えず金髪野郎を睨み付けた。

「……ちよつと。何で私縛られてるんですか？」

「貴様が” 預言の娘 ” の可能性があるからだ」

「預言の娘……？」

今も尚青ざめた顔でこちらを見つめている、小太りの男性が先程叫んでいた単語を思い出す。そういえばそんな事も言っていた気がする。

けど、預言の娘だと何故拘束しておく必要があるのだろうか。

普通異世界トリップでの預言と言えば、世界を救う巫女の登場とか、そういうむしろ歓迎される設定だと思っただが

「 魔王封印100年の後、異界から一人の娘参じ、即ち破滅の道開かんと」

「？」

男性としては割と高めな声色で、金髪野郎は淡々と言った。

結局彼が何を言おうとしているのか理解出来ず、私は次の言葉を待つ。その間にも両手首は拘束完了されてしまった。

「……魔王封印の後の100年後、異界から一人の娘がやって来て、この世界を破滅へと導く。昔からセリナー ज्याで伝わる預言だ。そして今年がその100年目になり、おかしな格好をした貴様が現れた。丸つきり預言通りじゃないか」  
「ちよちよちよ、ちよつと待って！」

次々と話を進める金髪野郎に、私は慌てて待ったを掛けた。  
今度は展開が急すぎる。

「預言の娘の意味は何となく分かったけど、破滅って一体なに？ 私、そんな世界を滅ぼすような力持ってないし、第一トリップヒロインってもつとこ、救世主みたいのじゃないの！？ 何でそんな

」

言っている事が支離滅裂になっている気はするけど、本当に考えがまとまらない。

魔王？ 封印？ 破滅？

世界を滅ぼす存在だから、私はこうして拘束されているの？ 滅ぼすって、私生まれも育ちもただの一般人なんだけど。こんなただの女子高生が一体どうやって世界を滅ぼすっていうの？  
新たに突き付けられた疑問符が、頭の中でぐるぐると回る。

「……貴様の言っている事はよく分からんが……とにかく、異界の者だと分かった以上野放しにはしておけん。さっさと連れて行くぞ」  
「？ 連れてくって、どこへ？」

捕獲された 宇宙人の如く、ハゲコンビに両腕を抱えられながら、私は尚も尋ねる。

既に歩き出そうとしていた金髪野郎はやれやれといった動作で振り返り、口を開いた。

「付近の最も大きな街だ。そこで貴様の公開処刑を行う」

「……………は!？」

言葉の意味を呑み込めず、私の思考は一瞬だけフリーズした。が、すぐにどすんと胸に先程の青年の言葉が重く押し掛かる。

公開処刑……………？ 意味が分からない。

私の脳裏に資料で見た、市民革命のギロチン台が瞬時に浮かび上がった。

そんなの歴史の教科書や本の中での出来事だ。

大体預言とかそのような事情で、人一人の命が奪える訳がない。何かの悪い冗談に決まっている。

早鐘を打ち始める自らの心臓を叱咤して、私は目の前の金髪野郎を見上げた。そして全身の血の気がみるみるうちに引いていくのを感じる。

……………違う。冗談なんかじゃない。この男は、本気だ。

彼の整った唇は一文字を結び、大きな瞳はしつかりと私を見据えている。冷たくも、温かくもない無表情。感情を含んでいないだろうその顔が、本当にこれから私を殺そうとしているのだと実感させた。

「行くぞ」

「！ ちょ、ちょっと！！」

金髪野郎が再び踵を返し、歩き出す。それに合わせて、私を支えているハゲオヤジ二人も歩を進め始めた。突然歩き出すものだから足がもつれ掛けたが、両脇のオヤジに引き立たせられ、無理矢理歩行を促される。

「やだっ！ 離して！」

無駄だと分かりつつも、私は身を擦じらせ、何とか二人から離れようと抵抗したが、当然逃げられる訳もなく。そのままずるずると、半ば引き摺られるようにして私はどこかへ連れて行かれる。

普通小説とかだと、最初は騎士や王子の類に出会って助けられたり保護されたりするのに。私はいきなり殺されちゃうわけ！？

常識に囚われて思考が置いてけぼりになり、焦りは生まれるがいまいち現実味が湧かない。

うそ。私、ほんとにこのままギロチン台で人生終わるの……！？

柄にもなく目頭が少しだけ熱くなり掛けたその時、

「キヤアアアアアア！」

耳を塞ぎたくなるような女性の金切り声が森に響いた。

## 4 逃走

何が起こったのか、分からない。

数歩分程引つ張られたところで、辺りに真つ黒な飛沫が散つたのだ。いや、黒じゃない。きつと昼間だったら、それらは赤く見えただろう。

悲鳴を上げたと思われる女性が、ドシヤリ、と地面に倒れ込んだ。続け様に他の人達も悲鳴を上げ始め、ある者はその場へ腰を抜かし、ある者は森の中へと逃げ去る。

私も叫びたかったし、すぐにでも逃げ出したかった。けど、まるで金縛りにでも掛かったかのように、体が思うように動かない。

見た事の無いような醜悪な生き物が、数十秒前まで私達がいた小道に現れていた。

「キルベルト様！ 魔物です！ 魔物が現れました！！」

私の腕を掴んでいる骸骨オヤジが、金髪野郎に向かって叫んだ。キルベルトと呼ばれた金髪野郎も既に歩みを止めており、やや後ろを歩いていた私達の方へと駆け寄って来る。

魔物……って、言ったよね？ このオヤジ。

言われて納得する。

最初に出会った人達のうちの一人である女性が倒れる傍らで、四つん這いになって鎮座している気味の悪い生き物。それは魔物と呼称されるのに相応しいと思った。

全身は墨を零したような黒色だけれど、松明の炎に照らされているその体に毛は生えていない。体のフォルムは豹とか、そういう獣系に似ているが、足の先端に付属されている爪は鉤のように鋭かった。口は白濁色の両目の際までぱっくりと裂けており、隙間から鋭い牙が覗いている。

どこからどう見ても、それは地球上には存在しない化け物だった。

逃げなきゃ、今すぐに。

本能か理性か分からないけど、強くそう思う。

このままここにいれば、あの倒れている女ひとみたいに、魔物の爪や牙でやられてしまうのも時間の問題だ。

それに仮にこの場で助かったとしても、私はいずれ金髪野郎達に処刑されてしまう。

だったら魔物の方に彼らが気を取られている今を逃せば、逃げ出すチャンスはきつともう訪れない。

逃げた後は……その時考えればいい。

小さく深呼吸をする。

心臓が脈打つ音が、周りの音を掻き消さんばかりに激しく響いている。

いつの間にか掻いていた大量の冷や汗が、背中を伝い落ちた。

「すぐに応戦しろ！」

金髪野郎の命令でオヤジコンピの力が緩んだその瞬間、私は走り出した。魔物も、人も、何もいない方向へ。

案の定魔物の方へ意識が集中している彼らの反応はワンテンポ遅く、いきなり捕まるなんて事はなかった。

金髪野郎が何か叫んでいたけれど、気に留めている暇は無い。

自分を殺そうとしている奴に情けは無用。それに、応戦とか何とか言っていたくらいだ。きつと戦う術があるのだろう。

私は振り返らずに、暗い森の中をひたすら進んだ。

\* \* \*

どのくらい走っただろう。だんだんと息が切れてきた。何せ両手首は縄で縛られたままなのだ。走り辛いつたらない。

それに加えて茂みや木の枝がしょっちゅう頬や腿に掠り、度々微かな痛みが伝わる。

生粋の文化部系女子である私が、どうしてこんな体を張ったランニングをしなきゃならないのだろう。数週間後には文芸部に入る予定だったのに

「ッ……！？」

突然手首に無数の針で刺されたような、鋭い痛みが走った。

その拍子に足がもつれてバランスを崩し、私は地面へ顔から勢い良く滑り込んだ。剥き出しの腿や頬は勿論のこと、肩や膝までも強かに打ち付けてしまい、あまりの痛さにその場へ蹲る。顔面から転ぶなんて、最悪だ。鼻血が出たらどうしよう。

「うう………あれ？」

擦ってしまった鼻を片手で摩りながら起き上がり、気付く。

やった！ 縄が切れてるっ！

邪魔で仕方がなかった縄が綺麗に切れて、地面に広がっていた。思いがけない幸運に嬉しくなり、私は思わず両手に拳を作ってガッツポーズを取った。が、

「いたッ！？」

両手首が酷く痛み、私は再び体を折り曲げた。そういえば、さっきは手首が痛くて転んだんだった。

月明かりに翳して、恐る恐る両手の様子を見ている。

制服の袖の部分が綺麗に裂け、両肘の下から両手の甲半分にかけて、鋭利な刃物で切られたような傷が走っていた。ポタポタと肘から赤い雫が滴り落ちている。

木の枝か何かで切ったのだろうか？ ……いや、木の枝なんかでそんなにがちがちに縛られた縄が切れるわけがない。それなら一体

私は慌てて立ち上がり、周囲を見回した。

何もいない。

月明かりに照らされた木々と、その向こうに潜む闇が見えるだけだ。ザワザワと木々が風に凧ぐ音が微かに響くのを数秒聞いた後、私は首を傾げる。

何となく、魔物が何かがいるような、嫌な予感がしたんだけど……。

気のせいだったらしい。

体の力を抜き、私は安堵の溜息を吐く。途端、両腕に鈍い痛みが舞い戻ってきた。

この傷も、きつともものすごく丈夫な木の枝か何か引つ掻けて付いたものだろう。きつとそうだ。

「ってか、いつの間にか生傷だらけだよ。いたたたた」

私はスカートのポケットに入っていたハンカチで両腕に付着した血を拭いた後、再び夜の森を走り出した。

けど、この時の私はまだ気付いてはいなかった。

魔物にも人間のように感情があり、知恵を持ち合わせている事を。

## 5 まるで本の中

「だっ……しゅーっ!!」

漸く鬱蒼とした森から出る事の出来た私は、我知らずバンザイのポーズを取っていた。

けれど次の瞬間には両膝に手を突き、肩で呼吸をする。

かなり疲れた。ずっと走りっぱなしだったし、魔物が追って来ていないか不安だったから。肉体的にも精神的にもくたくただ。

念のためもう一度背後を確認してみるのが、上手く撒けたのか、金髪野郎達が何とかしてくれたのか、深い森の中からは何も出て来る心配はなかった。

ほっと溜息を吐き、私は背筋を伸ばす。が、

「…………え？」

目の前の景色を視界に入れた瞬間、思わずそんな声を漏らしてしまった。

だっ

似てる……。

図書室で見た本の最後のページに描かれていた挿絵に、目の前の風

景がとても似ていた。

小石だらけの砂地に所々草の生えた、先ほどまでいた森とは打って変わり、閑散とした荒野。けれど挿絵とは少し違って、それ程範囲は広くなく、周囲は崖に囲まれている。

空もどんよりとした曇り空ではなく、真ん丸の月が浮かんだ満天の星空だし、細かい箇所は所々違っていた。

けど、一つだけ完璧に同じものがある。

荒野のほぼ突き辺りに聳え立っている、真っ白な石柱だ。

挿絵ではものすごくごつい魔王が、鎖でぐるぐる巻きにされていたけど……。

私は目を凝らし、石柱を観察する。

だれか、いる……？

ここからではよく見えないが、確かに白い石柱に何か黒っぽいものが貼り付いているのが見えた。胴体らしき部位から二本の陰が地面に向かって伸びているから、たぶん人間だと思う。

……よし、見に行ってみよう！

どっちにしろ崖に囲まれたこの場所は行き止まりのようだし、来た道を戻れば魔物や金髪野郎がいるし。他に道を探さなければならぬのは明白だ。

だったら少しくらい、様子を見に行っても良いだろう。やけに挿絵と雰囲気似ている理由も気になるし。こんな状況下で、好奇心旺

盛な私を止めることなど不可能だ！

私は障害物一つ無い砂地を進み、石柱にゆっくりと近づく。そして、目を瞬かせた。

お、男の人！？

石柱には挿絵のごつい大男とは似ても似付かない男性が、両手両足を鎖で固定されながら貼り付けられていた。

え、なんでこんな人っ子一人いない荒野に貼り付けにされてるの！？ この人。というより何者なんだ？ この状況明らかにおかしいよね？ まさかこの世界では人を上半身裸で貼り付けにする風習とかあつたりしないよね？  
つていうか……

頭の中で疑問符が疾走する中、私は目の前の男性を凝視する。

……きれいな顔、してるなあ……。

月の光に照らされて、艶を放つ黒い短髪。閉じられた瞼に並ぶ長い睫毛。血の気の無い青白い肌は陶器のように美しく、整った顔立ちと言い、一見すれば彫像のようにも見える。

上半身裸なのは……年頃の乙女としては頂けないものがあるけれど。

とにかく一見して見惚れてしまうほど、目の前の男性はかなりの美形だった。

だが、驚くべき点がもう一つ。

耳、とんがってる……！？

男性の両耳は人間のようにはカップの取っ手型を成しておらず、先が滑らかに尖っていた。まるでファンタジー小説の定番、妖精族エルフのような耳だ。

……この男性は、恐らく人間ではないのだろう。不思議と冷静な思考でそう思った。

ここは何せ魔物までもが存在する異世界。人間以外の種族がいてもおかしくないはずなのだ。

勝手に結論付けて、私は微動だにしない男性をぼんやりと見つめる。冷たい夜風が荒野を吹き抜け、男性の黒髪と、私の色素の薄い髪だけが静かに靡いた。

もしかしたら、もう死んでたりして……。

ふとそんな考えが脳裏を過った。

こんな荒野に一人だし、全然目え開けないし、何より

……冷たい……。

そつと肩に触れてみたが、氷のように冷たかった。この体温で生きていられる訳がない。  
死んでいるとは分かったけれど、不思議と恐怖は感じなかった。  
目の前にいるのは、死体なのに。  
あまりにも綺麗な顔だから、今にも動き出しそうで。

……やっぱり、本当は生きてるんじゃないかな……。

結局その結論に至る。

最終確認だ。相手は上半身裸だから、気が進まないけれど。好奇心旺盛な私の探究心は確かめるまで止められない。

私は恐る恐る彼の冷たい胸に耳を当ててみた。ひんやりとした感触が耳から頬にかけて直に伝わる。

「おい」

「!？」

心音を確認する間もなく頭上から声が聞こえ、私は驚いて男性から飛び退いた。

声の主は、確認するまでもない。

目の前の男性が、先程まで閉じていた瞼をしっかりと開けて私を見つめていたから。

血のような、真っ赤な瞳。

男性は驚きと羞恥で硬直する私を暫く凝視すると、おかしそうに整った双眸を歪めた。

「女。魔王である俺サマの寝込みを襲うとは、いい度胸してんじやねーか」

「……は？」

魔王、だと？

## 6 自称魔王サミス俺サマ

魔王。

そう言われて私がまず思い浮かべたのは、図書室で見た不思議な本の挿絵だった。

勇者に倒された”魔王”が、巨大な純白の石柱に貼り付けにされている。見ていただけで陰鬱な気分になりそうな絵。

姿形は違えど、確かに状況的に考えると目の前の男性は今、挿絵の中の魔王と同じポジションにいる事になる。

けどなあ……。

唸りながら、私は首を捻った。

私的に魔王と言えどもっとこう……：どーん！ と、いかにも悪っぽい禍々しいオーラを四六時中発しているイメージなのだ。かなり抽象的だけれど。

尖がった耳や挿絵と同じ状況を除けば、目の前の男性は普通の格好良い兄ちゃんにしか見えない。魔王だと唐突に言われても、私にはいまいちピンとこなかった。

「おい女」

「？ はい？」

謎の沈黙の中呼ばれ、私は素直に返事をする。偉そうなのはいかにも”王”らしいかな、等とぼんやり思いながら。

「見た所おかしな格好をしているが、お前、ニンゲンか？」  
「人間……」

私に人間なのかと尋ねるくらいだから……目の前の彼も含めて、この世界にはやはり人間とは別の種族が存在しているようだ。ううむ、さすが異世界。

「おい、聞いてんのか」

「！ ああ、はい。見ての通り私めは紛れもない人間ですとも」

なんか態度悪いなあ……こいつ。

普通初対面でこんな高圧的な態度取るかー？

内心悪態を吐きながらも私が答えると、彼は口元に不敵な笑みを浮かべた。

「なら、問題無いな。……女、俺様を封印から解放しろ」

「封印？」

私が首を傾げると自称魔王の兄ちゃんは、「これのことだ」と顎で彼の両手足を石柱に固定している鎖を指し示した。

上半身裸の状態に鎖でぐるぐるに捲かれて、改めて見るとなんだかちょっと危ない絵面。

これが図書室の本の魔王がされたのと同じ”封印”であるかどうかはともかく、他人に助けを求めるくらいだ。彼が何者かに無理矢理この石柱へ”封印”じられたのは本当だろう。でも……

「無理ですよ。そんな頑丈そうな鎖、私には外せません」

きつぱりと断った。

第一私はムキムキまっちなボディビルダーじゃない。自分より遙かに体格の良い彼が外せない鎖を、一介の女子高生である私が外せるわけがないのだ。

けれども目の前の彼は威圧的な表情を崩す事なく、尚も私を見下ろして言う。

「誰が直接鎖を外せと言った。外すのはこの俺様だ」

「??？」

何を言っているのかさっぱり意味が分からない。

しかし彼は首を傾げる私の事はお構い無しに、ペラペラと語り出した。

「いいか、女。こんな封印、俺様の魔力が少しでも回復すれば自力で解く事なんざ造作もねーんだ」

「はぁ……」

「だが俺はいま腹が減っている。なにせ封印されてから、何も食ってないんだからな。栄養を摂取しなければ俺の本来の力も戻らない。

つまり、腹が減ったままではこの忌々しい封印を解くことは不可能  
ってことだ」

「へえ……」

「そういうワケだから

女、俺様に口付けをしろ」

「……………はいいいいいッ!？」

それまでぼんやりと彼の話を聞いていたが、一気に脳が覚醒した。

口付け!？ 口付けて、き、キスのことだよね!？

激流の如く頭部に一気に血が上っていくのを感じる。

「腹が減ってるからって、なんで突然私があんたときッ、ききき、  
キスしなきゃなんないわけ!？ 話の流れおかしいでしょ!？」

「おかしくなんかねーよ。俺様の食事がこれなんだから」

キスが食事って、こいつ変態か!？ それとも新手的セクハラなの  
か!？

ああなるほど。こんな変質者丸出しのこと言う上半身裸の変態野郎  
だから、公然わいせつの容疑でこうしてこっちの世界の警察的な人  
たちに捕まったんだな! まったく見た目はカッコいいのにおかし

な性癖を持って、残念なこと極まりないなこのにいちやめ！

そんな思考を巡らせていると、呆れたようなわざとらしい溜め息が聞こえた。

「あのなあ、勘違いすんなよ？ 俺だって復活最初の食事はお前のような並み顔の小娘なんかじゃなくて、そりゃもう官能的な体の超絶美女にしたかったさ。けど背に腹は代えられないって言うしな。しょうがないからお前で我慢しておいてやる」

「なっ……！ 何よその言い草は！ 確かに並み顔の小娘は否定できないけど……言い方ってもんがあるでしょうが！」

「間違つてないならいいじゃねーか。ほら、こうやって話してる時間も勿体ねえんだ。さっさとしろ」

そう言うと彼は多少動くらしい上半身を前へ傾げ、ん、と顔を突き出し、瞼を閉じた。

キス待ち体勢を取られて、私の思考はますます炎上を起こす。

な、なんか私がこの男とキスすること、確定になってるみたいなんだけど。ってというか私の意思は無視ですか。なんという俺様。

火照る頬が夜風に晒されるのを感じながらも、私は改めて目の前の変態野郎を観察する。

スツと通った鼻梁に、まつエクしたのかと疑いたくなるほど長い睫毛。相変わらず青白い肌は血色が悪いが、整った形の唇は微かに桜色が灯っている。

うん。何度見ても、いくら変態でも、この男は美形だ。100人に街中アンケートをしたら、間違いなく100人がそうだと答えるだ

ろう。世の女の子たちはこんな美形にキスをせがまれたら、喜んで受け入れるのだろうか。

少なくとも、私には無理だ。

恥ずかしながら、私にはこれまでの人生でそのような経験がない。そりゃあ私だって華の16歳。何度か男子と付き合ったこともあるさ。けど、キスマでは至らなかったのだ。何故かそういう段階に至る前に、相手に振られるんだよねー。不思議。

まあその話は置いて。とにかく、見ず知らずの男といきなりキスをするなんて、やはり出来る筈がない。

……逃げよう。

目の前の男を一瞥した後、周囲を見回す。

さつきも確認したが、やはり荒野の先には森と崖しか見えない。とりあえず、私が出てきた方とは離れた方向の森へ行こう。金髪野郎とか魔物とか、かなりリスクは高いけれど。ひよっとしたら別の場所に出られるかもしれないし。どっちにしろ別の道を探さなきゃいけないかったんだし。

こんな変態野郎にファーストキスを捧げるなんて絶対イヤだもんね。目え瞑ってる今がチャンスだっ！

踵を返して走り出そうとしたその時、

「おい」

低く、怜悯な声が背中に突き刺さった。

うっおおおお気付かれたあああ！

「な、何でしょう？」

油切れのロボットのような動きで、私は恐る恐る後方を振り返った。しかし予想に反して男は険しい表情で、私の更に向こう側を見据えている。

「来るぞ」

「？ 何が？」

「ニンゲンの血肉を欲している、下賤な奴等だ」

彼の言葉を合図にしたかのように、荒野に醜悪な咆哮が響き渡った。弾かれたように後方を振り返る。そして私は思わず小さく悲鳴を上げた。

森の中にいた魔物……！

黒くしなやかな肢体が、遠方からこちらに向かって疾走して来ていた。確認出来るだけでも5体はいるだろう。

やっぱり、縄が切れた時もありつらが追って来ていたんだ……！

両腕の傷が鈍く痛む。今度攻撃されたら、この程度の傷では済まないだろう。下手すると

……逃げなきゃ。でもどこへ？

森とは違い、この荒野には障害物が無い。森へ再び逃げるとしても、その方向から魔物達が向かって来ている。絶体絶命とはこのことだろう。

今度こそ私、死ぬのかな……？

「おい女」

頭上から声を掛けられ、思い出す。そう言えば、この男もいた。彼は自身も危機的な状況下にいるにも関わらず、平然とした様子で私を見下ろしていた。

「このままあいつ等に八つ裂きにされて、死にたいか」

「……！ し、死にたいわけじゃないじゃない！！」

死にたくなんかない。

こんな訳の分からない場所で、訳の分からないまま、16年の人生に終止符を打つのは御免だ。

「じゃあほら、死にたくないならしろよ。助けてやるから」

再び前屈みになり、キス待ち体勢になる男。

こゝ、この男、こんな状況下で言うか！？ ……でも…

最も近くまで迫っている一体は、あと5秒もしたら私の背中にその鋭い爪を突き立ててしまうだろう。どちらにせよ、今の私には逃げるという選択肢は残されていない。

このまま何もしないで死ぬくらいだったら

さらばッ！ 私のファーストキス！！

目の前の男の両肩に手を掛け、私は自らの唇を彼のものと重ね合わせた。

## 7 専用食認定

ひんやりとした、柔らかい感触。体が冷たければ、当然のように唇も冷たかった。

自身の熱が、唇を伝って彼に奪われているようにすら感じる。

……っというか、本当に奪われてる！？

身体中の力が重ねられた口元から吸い取られていくような、そんな気分襲われる。意識が朦朧として、頭がぼんやりと痺れてきた。乗り物酔いした時のような、ぐわんぐわんと脳が揺れるあんな感じ。なんだか気持ち悪くて、私は慌てて彼から離れようとした。が、頭上から何かが壊れるような金属音が聞こえたかと思うと彼に腰を引き寄せられ、更に深く口付けされる。

彼の両腕を封じていた鎖が壊れたらしい。ぼんやりとした思考で理解したその時、

グシヤッ

何か生っぽいものが潰れるようなおぞましい音が、真後ろから聞こえた。

驚いて息苦しい中横目をやると、私の腰に回している方とは逆の彼の腕が、真っ直ぐ私の後方へ向かって伸びているのが見えた。青白い肌には、なにやら黒い液体が散っている。続けざまに彼がその腕

を引き戻すと、背後で何か大きな物が地面へ落下する音が響いた。

「……邪魔だ、どいてろ」

「んツ……わっ!？」

漸く唇が解放されたかと思った矢先、私はほんざいに彼に地面へと突き飛ばされた。

「い、いきなり何すん……………」

あまりの扱いと痛む体に腹が立って、私は倒れた姿勢のまま声を上げた。が、目の前の光景にその言葉はぐっと喉の奥へと押し戻される。

そこには胴体にぼつかりと風穴を開た魔物が、地面に横たわっていた。

近距離に居る事から、先程私の背後で嫌な音を立てたのは恐らくこいつだろう。

……………きもちわる……………。

月明かりのみでは判別し辛いのが、かなりの血が地面に広がっていた。当然ながら暴力沙汰とは殆ど無縁な世界で生きてきた私にとっては、これほどの鋭い血臭は初めての体験なわけで。少しばかり吐き気が

込み上げてくる。

魔物の亡骸から発せられる悪臭に顔をしかめっていると、矢継ぎ早に辺りから耳を塞ぎたくなるような悲鳴と、肉のひしゃげるような生々しい音が響き渡った。

驚いて魔物の変死体から視線を外し、そちらへと顔を擡げる。そして目を見開いた。

「うそ……」

開けた荒野には、4体の魔物の亡骸が点々と散らばっていた。

そしてその中心には四肢を赤黒く染め上げた男が、満足そうな笑みを浮かべながら佇んでいる。

私が目を離れた一瞬で、彼はあれだけの魔物を倒してしまったというのだろうか。しかも素手で。

あいつ、もしかするとかかなり強い……？

ぞくりと、恐怖とも畏怖とも取れない感情が込み上げる。

人外パワーというやつだろうか。

どちらにせよ、目先の脅威は去ったようだ。心臓は未だばくばくだし、顔の火照りは冷めていないけれど。

取り敢えずこのまま地面に倒れていてもしょうがないから、私は立ち上がるうとした。が、

「ふ……あ、れ……？」

体に思うように力が入らず、上体を起こす事が出来ない。操り人形の糸が切れたかのように、ポスンと地面へ再び倒れ込んでしまう。

ど、どうして！？ 貧血なんかあった事ないのに……。

何度も両腕を突いて立ち上がろうと試みるが、やはり上手くいかない。

半ば芋虫状態で言う事を聞かない体と奮闘していると、視界に突然陰が掛かった。見上げると、返り血で所々青白い肌を黒く染め上げた彼が、すぐ傍で私を見下ろしていた。

「立てないのか」

「見ればわかるでしょ。……さてはあんたの仕業だね。一体私に何をしたの？」

「お前の” エネジア ”を喰った」

「??? えねじあ？」

「生命エネルギーみたいなもんだ。つーかさ」

伏せっている私と視線を合わせるよう、彼はその場へしゃがみ込む。

「お前、何モンだ？」

「何もんって……」

それはこっちが聞きたい。

今の私の状況やこの男の強さから考えるに、どうやらキス……というか、人のエネルギーを糧に生命を維持しているのは本当だと思える。

だったら何でこの男はあんな所に封じられていたのだろう。公然わいせつ罪でもなさそうだし。ひよっとしたら強すぎるから封印されていたとか？ というか、そもそもこの男は一体どこの誰なのだろう。

とにかく考え出すとキリがない為、取り敢えずは彼の質問に素直に答える事にする。

「別に、私は普通の人間だけど……」

「普通のねえ………まあいい」

「!? ふあああッ!? なにしてんのさ!」

突然くるりと視界が反転したかと思うと、私は男に俵担ぎにされていた。

「お前のエネジア、この世のものとは思えんウマさだったから、俺様の専用食にしてやる。光栄に思え」

「……はああ!」

思わず素っ頓狂な声が出てしまった。

いやだつて専用食つて、言っている意味が分からない。というか、キスがうまかつたつてやつぱりこいつ変態か!? 変態なのかッ!?

「ちよつと! 専用食つて一体どういう意 !? ひゃあああああああ!?!」

尋ね掛けた所で突如全身を強い浮遊感が襲つた。

男が私を担いだまま、崖の方へ向かつて跳ね上がったのだ。それは最早、ジャンプとは言い切れない勢いで。ぐんぐん高度が上昇し、地面が遠く離れて行く。

「ちよつ、高い! 高いよ!! 高すぎるつて!!」

私は咄嗟に身を擦じらせ、男の首へしがみ付いた。相手が半裸だろうが気にしない。だつてこれ、絶対マンション5階くらいの高さはあるから。いくら腰を抱えられているとは言え、手放しているなんて怖すぎる! お尻の辺りがひよおおつてなるよ!

「うつせーなあ。崖越えた方が楽じゃねーか」  
「で、でも……」

言い淀んだ後、前方(進行方向からすれば後方だけれど)へ視線をやってぎよつとした。

金髪野郎……！

青々とした樹海から丁度出て来た様子の人影は、確かに美しい金色の髪をしていた。加えて夜の闇の中、はっきりと目立つ白装束。その人物は紛れもなく、私を殺そうとした金髪野郎だった。ぶっちゃけ今の私にとって、魔物と同レベルで出会いたくない相手だ。

魔物がこちらまで追って来たから、てっきりやられてしまったのかと思っていたが、どうやら無事だったらしい。

はたと視線が交わる。

わああ、何かものつすごい険しい顔してる気がする……。

距離が離れている為、しっかりと確認は出来ないが。

金髪野郎を観察していると彼に続いて、次々と似た様な白装束を着た人間が森の中から姿を現した。恐らく金髪野郎の仲間だろう。10、20人はいるだろうか。いずれも私達の姿を見止めては、何かを叫んでいるような素振りを見せた。

「魔 が 逃 ぞ」

「 王 娘 」

全ては聞き取れないが、何やら魔王がどうのこうのと言っているらしかった。

そう言えば私を絶賛誘拐中のこの男も、自分の事を魔王等と名乗っ

ていた気がする。それに金髪野郎も、森の中で魔王封印の後うんた  
らかんたらと何やら話していたような

……あれ？

そこまで考えて、背中から嫌な汗が一気に噴出するのを感じる。

もしかして、私ものすごいことをやらかしたんじゃないか……。

「ね、ねえ」

「あ？ なんだよ」

相変わらず高圧的な態度ではあるが、こちらを振り返り返事をする  
男。

とてもそうは見えないけれど

「あんだ、もしかして本当に本当の魔……王、だったりするの……  
？」

「何度もそう言ってんだろーが。俺様の他に誰がいんだよ」

う、うそでしょ……。

さーっと、今度こそ全身から血の気が失せて行くのを感じた。

しかしこの男が魔王だと認めれば、これまでに感じていた全ての疑問が綺麗に解決するのだ。

彼がああ石柱に封印されていた理由も、人間でない一体何者なのかも、どうしてあれだけ強いのかも。

って、いきなり魔王だなんて言われても、そう簡単に信じられないよなあ……。

ちらりと男の後頭部を見やった後、深い溜息を吐く。

只でさえ異世界やら魔物やら処刑され掛けるやらで、頭がいっぱいいっぱいなのだ。

私の脳内キャパは、異世界トリップした時点で既に破裂寸前なのである。その上魔王なんて……恐怖云々以前に、もう非現実的要素は勘弁してほしいという気分の方が大きい。

まあとにかく、少なくとも今は、魔物や金髪野郎達から命を救ってくれたこの男　魔王に感謝すべきなのだろう。

態度はでかいし、セクハラ発言までしてくるし。良いヤツか悪いヤツかは、わからないけれど。

でも金髪野郎の時のように、すぐに殺される恐れはきつとない筈だ。

……次もしもキスを強要されるような事があれば、全力で我が唇を死守しよう。

遠ざかる白装束集団を尻目に、私は強くそう思った。

## 8 現状把握

パチパチと木々の弾ける乾いた音が夜の森に響く。

あれから20分程経過しただろうか。

私を担いだ状態のまま、魔王は森の中を人間離れした（人間じゃないんだけど）スピードで疾走し続けた後、この場で足を止めた。

私としては金髪野郎達が追って来たりしないかと心配だったけれど、魔王がこれ以上はお前が重くて走れないと、嫌味を含ませて喚いたものだからどうしようも出来ない。

「悪かったな、おデブで」と憎々しげに悪態を吐きながらも、私は彼にぞんざいに地面へと降ろされるのであった。

膝を抱え、目の前で燃え盛る焚火を見つめる。

この世界の名はセリナージャ。曖昧だが、金髪野郎が言っていたのを覚えている。

そして私が今いるこの国の名は「テルミオール」というらしい。これは先程絶賛疾走中だった時、魔王に聞いた。封印されている間に国名や支配地が変わっていなければ、という前置き付きではあったが。

当たり前だけど、聞いたことない名前だよなあ……。

両膝に自らの額を押し付けながら、はふうと深い深い溜め息を吐いた。

もう十分わかってはいたけれど、改めて現実を突き付けられたような気がして、少しへこみそうになる。

「で。お前がニンゲンなのは分かったが、一体どこの国のモンなんだ？」

唐突に切り出され、私は顔を上げた。

魔王の紅い瞳と、焚火を挟んで視線が合う。うっむ、見た目だけは本当に良いな。

「おかしな格好をしているし、この国の名を知らないなんて普通有り得ねーだろ。俺様が封印されている間に、その服が流行ったって言うなら話は別だがな」

なるほど。金髪野郎のように、異界の娘がやって来るといふ預言のことは知らないのか。

まあ封印された本人が、その後に言い伝えられた預言を知る訳がないのだけだ。

内心納得しつつ、私は細かい説明が面倒なので簡潔に答えることにする。

「私はこの世界の人間じゃないよ。ついさっき、異世界から来たの」  
ぱちくり。魔王は驚いたような様子で数度整った双眸を瞬かせた。  
その後、何やら訝しげな視線を私へくばせてくる。

そりゃいきなり異世界からやって来ましたなんて言われても、信じられないよね。

すぐに私を異世界人と決め付けた、金髪野郎達の方が異常だったの  
だろう。

この世界へやって来てすぐ出会った彼等の事を思い出し、私は苦笑  
する。

だが魔王は数秒の間後、何故か満足げに頷いた。

「なるほどな。理解した」

おや、意外。

簡単に信じてもらっちゃったよ。

「道理でお前のエネジアが、この世界で味わった事のない味がする  
わけだ」

「!!! それが理由か! この変態! 色欲魔王ツ!」

「んだとコルア! 俺様のどこが色惚けしてると言うんだ」

「全てだよ! キスが食事とかうまかったとか」

「そのどこがいけないっつーんだよ。俺にとってはごく普通のことだ」

魔王の物分かりの良さに感心した私が馬鹿だった。

ぎゃあぎゃあ言い合いをしながら内心嘆息していると、突然魔王が難しい顔をして黙り込んだ。私も釣られて口を閉じる。

何やら思案しているようだけど、一体どうしたのだろう。

「……まあ、それだけが理由じゃねーけどな」

「へ？」

ポツリと呟いた言葉が聞き取れなくて、私は尋ね返す。が、魔王は素知らぬ顔で何も答えなかった。

何だか甚く真剣な面持ちだったから、きっと彼にとっては重要な事を言ったのだろうけど。

うっ……気になるじゃんかあ。

暫く睨み続けてみるが、やはりそれ以上は何も言おうとしなかった。まあ言いたくないのなら、これ以上詮索するつもりはないけど。背後の木に背を預けて一息吐いた後、私は最も気になっていた事を尋ねてみることにする。

「じゃあ、元の世界に戻る方法なんて」

「俺様が知るわけねーだろ」  
「ですよねー」

はああとがつくり肩を落とす。

確かに先程100年の封印から解かれた彼に訊いても、得られる情報は少ないだろう。

けれど右も左も分からないこの異世界。当然ながら知り合いもいないし、これから自分がどうするべきかも分からない。

成り行きで連れ去られて来たけれど、今私が頼れるのは目の前のこの男だけなのだ。

なんか、改めて暗い気分になってきた……。

だって人間じゃないし。俺様だし。変態だし。

どうせなら物腰の柔らかい、優しくって聡明な王子様に保護されたかったよ。

ちらりと目の前の魔王を見やった後、私は再び盛大な溜息を吐いた。そんな私の様子に気付いたらしい。魔王はムツとした様子で身を乗り出してきた。

「おいお前、いまこの俺様を小馬鹿にしただろう」

「え。……いやいやそんな滅相もない。あなたサマのような、変態色欲魔王殿と異世界で出くわさせて光荣だと思っていたとここでござい  
ます」

「それがお前のいた世界での目上の者を敬う態度か。田舎臭い並み

顔女」

「なッ……！ 並み顔はともかく田舎臭いってどういことよ！  
これでも私、生まれも育ちも東京なんだからね！」

「トーキョー？ それはお前のいた世界にある町の名前か」

おつといけない。

きよとんとした顔で尋ねられ、私は我に返る。

私とした事がついついヒートアップしてしまった。だってあまりにも目の前の変態の態度が偉そうでムカついたから。

一度咳払いをした後、私は手近にある木の枝を持った。大雑把ではあるけれど、地面に世界地図を描き出していく。

「それがお前のいた世界の地図か」

焚き火の脇から私の手元を覗き込みながら、魔王が再び尋ねてきた。  
私は手を動かしながら、黙って頷く。

「随分沢山の大陸があるんだな」

「うん。国もたぶん……200近くはあると思う。で、ここが私の  
住んでる国日本の、東京。東京はこの国の首都なの」

「首都……ってことは、王がいるのか？」

「日本は王政じゃないからいないよ。一応天皇っていう昔から代々  
続いている、国のシンボリックな存在の一族はいるけど、実際に政治を  
動かしてるのは総理大臣っていう政治家のトップなんだ。王政の国  
でも似た様な感じかな」

「へー、どこの世界でもニンゲンの支配体制はごちゃごちゃしてい

て解り辛れえな」

魔物は違うのか、と尋ねようとしたけれど、寸でのところで躊躇う。

目の前のこの男は自分の事を魔王とは言っけれど、魔王とは恐らく”魔物の王”の略称だ。そうすると、この男も分類上では魔物ということになる。

けれどそう考えると、いまいち腑に落ちない点が現れる。

魔物の王なら、先程襲ってきた魔物達も彼の仲間のはずだ。しかし彼は、それらを平気で惨殺していた。

加えて目の前の彼は魔物と呼称するには、外見があまりにも人間に近すぎる。どうしても先程の醜悪な魔物達と同じ種とは思えないのだ。

こうして普通に、会話もできてるし……ん……

「ふあああああ〜」

「でけえあくびだな」

思わず出てしまったあくびを慌てて手で押さえる。

うう。こんな状況下でも、生理的現象が起きてしまう自分の体が恨めしい。

「眠いのならもう寝ろ。エネシアは疲労が溜まると味が落ちるんだ」

あくまでも目の前のこの男は、私を食糧として傍に置くつもりらしい。  
というか、もしかしなくても今夜は野宿なのかこれは。テントも寝袋もありませんぞ。もしもーし。  
言っただけの事は多々あるが、魔王が両腕を組んだ状態で木に背を預けたまま目を瞑ってしまった為、私の大きく開いた口は仕方無しに閉じられる。

くそう。色々ム力つく奴だけど、やっぱり顔だけはものすごくいいな。

人間離れた（人間じゃないんだけど）容貌を憎々しげに見つめた後、私は溜息と共に視線を外した。

今が何時頃なのかは分からないけれど、魔王の言う通り、このまま起きていても体力が消耗するだけだろう。味が落ちるかどうかは、別として。

ぐっぐっぐとして全身が痛い……。ベッドが恋しいよお。

試しに焚火を背にして地面に寝転がってみたが、やはり簡単に眠れそうにない。

それでも目を閉じて無理矢理眠気を誘う。

疲れた。とにかくこの数時間でいろいろありすぎて疲れた。  
分からないことだらけだし、心身共にズタボロだ。  
早く眠りに就いて、疲れを癒したい。そしてあわよくば、明日目を  
覚ませば自室のベッドで横になつていたい。夢落ち希望。

そんな事を考えていると、やがて睡魔は訪れる。  
異世界の空の下、私は深い深い闇の淵へと沈んでいった。

## 9 早朝の唇戦争勃発

まどろんだ意識の中、ザワザワと木々の風ぐ音が微かに聞こえる。続けて頬に感じる心地良い風。

あれ、私窓開けて寝たっけか？ まあいいや。

それにしても妙な夢を見た。

恭平と一緒に図書室にいたら変な本が突然光って、気付いたら夜の森にいてそこは別世界で、金髪野郎に殺され掛けて魔物に襲われてファーストキスで魔王を復活させて……うん、とてつもなく、妙な夢を見た。早速今日学校で恭平や友達に話そう。

大体異世界トリップなんてこのご時世、ある訳がないじゃないか。漫画や小説じゃああるまいし。

にしては、随分リアルな夢だった気もするけど。

森なんか今みたいにキャンプ場のような青っぱい匂いがして、魔王も人間に似てはいたけれど、何処か浮世離れた容体だった。

真紅の瞳に尖がった耳、平凡女子高生である私なんて簡単に気圧されてしまう整った顔のパーツ。そう、丁度今私を見下ろしている彼のような　　って

「ぎゃあああああッ!? チカン! 変態! お巡りさん!

!」  
「いだッ、いでェ! てめっ、突然殴んなこらっ」

その距離約10センチ程。そんなあと少しでキス出来そうな距離に、目を開けた瞬間夢の中で出てきた超絶美形の顔があったものだから。驚いた私は取り敢えず貞操を守るために、某北斗七星格的格闘漫画並みのパンチを発動した。

ポカポカポカ。手に衝撃が伝わる。目の前の男が声を上げる。あれ？

夢じゃ、ない？

絶えず美夜流スペシャルコンボをお見舞いしつつも、私は目の前の男を見上げた。

確かに彼は今、私の目の前に存在している。人間に見えるが絶対に人間ではない、記憶の上層部に存在する魔王が。私に殴られてくぐもった声を上げている。

続けて周囲を見回すが、そこにはデスクもタンスも窓も見当たらず、ただ高く聳え立つ木々があるだけだった。ようやく私の寝ぼけた脳が覚醒する。

夢じゃ、なかつたんだ……。

しおしおと体中の熱が冷めていくのを感じる。

異世界、セリナージャ。私が昨日ここへ迷い込んだのは夢でも何でもない、現実だったのだ。

軽く眩暈を覚えそうになるのを必死に堪えていると、両腕に強い引

力を感じる。

正面に視線を戻すと両手首は魔王に掴まれ、私の攻撃は完全に封じられていた。

「起きて早々何しやがんだ、並み顔暴力女」

「そ、それはこっちのセリフ！ さっき私に何しようとしたのさ色欲魔王ッ！」

改めて先程の至近距離にあった彼の顔を思い出し、思わず顔が熱くなりながらも負けじと捲し立てる。  
だが魔王はしれっとした顔で、

「何って、食事に決まってるだろーが」

「うああやっぱり。っていうか、寝込みを襲うって人としてどーなの！」

「俺人じゃねーし」

「た、確かにそうだけど……って違う！ そういつことじゃなくて

」

「じゃあ起きていたらいいのか？」

「へ？」

思わず間拔けな声を漏らした次の瞬間。ずずい、と突然魔王の顔が近付いた。

ちよつと待て。近い、近いぞ。美形が近い。が、私は素直に喜べない理由がある。

本日二度目の我が唇のピンチッ！！

この体勢は間違いなくキス発動前体勢。畜生、そんな易々とされてたまるか。私はそんな安い女じゃないぞコラア！

両手首は掴まれたままの為、私は半ば格闘家の臨戦態勢のようなポーズで、上半身を後方へ精一杯反らして顔を遠ざける。だが大の男の、しかも人外である魔王の力に敵う筈がない。呼応するように、魔王は再び私の方へと顔を近付けてくる。

「このッ……さっさと大人しく食われる並み顔！」

「いーいーやーいーッ」

とは言ったものの。

い、いかん。足腰がそろそろ限界だ。今にもグキッと音を立てそう。異世界に来てまでギックリ腰とか、間抜けすぎる。

けどこの変態ケダモノ色欲魔王から逃れる術が思い浮かばない。何せ両腕は彼によって塞がれているのだから。

けどこのまま黙って唇を奪われてたまるかッ！

「ふんッ！ー！」

「おぐうッ!？」

脚に伝わる嫌な感触と衝撃と同時に、目を見開く魔王。その様子にぎよつとしつつも拘束する手の力が緩んだため、私は慌てて後方へと後ずさる。

次の瞬間にはへなへなと、魔王は股間を押さえながらその場へたどり込むのだった。

\* \* \*

「てんめエ……ほんと、何しやがんだ」

「無理矢理キスしようとするあんたが悪いんでしょー」

地面に座りながらも未だ悶絶している魔王に、私はそっぽを向いたまま言い放った。

勢いに任せて蹴っちゃったけど……

なるほど。魔物の男でも急所は同じなのか。すんごく痛そう。

効果は抜群のようだけど、男性の股間を蹴り上げるなんて、清纯派乙女としてはあるまじき行為！ 出来れば今後は使うことがないこ

とを願いたい。

まあこれに懲りて、魔王も強引にキスをせがんだりはしなくなるだろう。まったく、朝っぱらからハードな運動をってしまったよ。

「ん？　ねえ、なにあれ？」

呻き声を上げている魔王が居た堪れなくて（私がやったのだけれど）、視線を外していると、木の枝に引つ掛かっている洋服のようなものが目に入った。ひらひらと微風に靡いている。

「……………」

しかし私の問いに魔王は答えない。

何ていうか、不貞腐れた子供みたいな顔をしてそっぽを向いている。

「……………おい」

「……………」

「もしかしなくても、まだ怒ってる？」

股間キックをしたことに。

案の定、魔王は剣呑な表情で私へ視線を向けてきた。

「ごめんって。つい咄嗟に体が動いちゃったってどうかさ」

「お前さ」

漸く声を発した魔王に、私は両手を合わせながら、下げていた頭を上げる。

もう魔王は痛み顔に顔を歪めていなかった。

「そんなに俺様と口付けするのがイヤか？」

「……………え!？」

まさかの問い掛けに我が耳を疑う。

……………ええと、つまり魔王は今、全力で彼のキスを拒否した私の態度に、少なからず傷付いている……………ということなのだろうか？

意外だ。この高慢な魔王がそんな感情を持ち合わせているなんて。

きつとこれまでの人生で” 食事 ” と称して喰らってきた女性達にも、あれほどの拒否反応を示されたことがなかったのだろう。ましてやパンチや股間キックなんて……………えげつないもんだ。

嗚呼、そう考えると何だか目の前の魔王が、何だかしよげた子犬のように見えてきたよ。

「嫌っていうか……………」

「イヤじゃないのか？」

そう言うや否や、ずずいつと四つん這いになって私へ接近して来る魔王。

うおおー一気に距離を詰められたぁ！ 美形が近いPart 2！

息が掛かりそうな距離に迫る魔王の顔。冷静になって見るあまりに整った顔立ちに、私の顔にはぼつと火が灯る。

そ、そんな懇願するような、甘えるような目で私を見ないでくれえええ！

「嫌じゃない……ってというか、経験が乏しいからびっくりするって  
いうか、」

ああああ何言ってるんだ私いいいい！

キツパリと物を言えない日本人の気質が恨めしい。

「ッ!？」

するりと色素の薄い私の髪を梳き、魔王はそのまま白く長い指を私の頬へ這わせてきた。背筋に何とも言えない悪寒が走る。

な、なんだこのアダルティな雰囲気は。実力行使から一歩引いた手段に出たか魔王めっ！

もう一度キックをお見舞いするか!? いやさっきの一件のせいで私の中に罪悪感が生まれてしまった。

そうこう思考を巡らせている間にも、魔王の顔が接近してくる。

う、うおおおおおおおっ！

ゴンッ

バサッ

………あれ？ 魔王どこ行った？

咄嗟に仰け反って背後の木に後頭部が激突した途端、突然目の前の魔王の顔が視界から消えて、代わりに草色の布を被った頭部が現れた。

頭上の木の枝を確認し、再び目の前の頭部に視線を戻す。

なるほど。

さっきのぶつかった衝撃で、木の枝に吊るされてた洋服らしきものが落ちてきたのか。

私が納得する傍らで、目の前の洋服らしきものを被った魔王は何かを堪えるかのように、小刻みに震えていた。

\* \* \*

「………たく、なんだって言うんだ！」

さっきの出来事で気分が萎えたのか、魔王は私に何をすることもな

く、苛立った様子で頭部に被さった洋服らしきものをひっぺがし、立ち上がった。  
二度も食事を妨害されては、憤慨するのも当然だろう。私は日本人お得意の愛想笑いを浮かべ、極めて相手の神経を刺激しない言葉を選ぶ。

「災難だったネ」  
「！」

ん？ 魔王のこめかみに青筋が走った気がしたけど……気にしない。  
まあ何ていうか、うん。結果オーライだったね！ さっきは危うく甘い雰囲気魔王に流されるとこだったよ。

「……あ、そう言えばさっきも聞いたけどさ。その手に持ってる服、何なの？」

「……………このまま半裸ってわけにもいかねーからな。今朝お前がぐーすか寝てる間に調達してきたんだ」

相も変わらず憤懣が鬱積している様子だが、数秒の間の後、魔王は私の問いに答えてくれた。

っていうか、さっきのしおらしい彼は演技だったのか！ 随分今と様子が違うじゃないか。  
まったく、すっかり騙されたわ。これからは気を付けないと。

「……このままこうしていても仕方ねーし、……そろそろ行くか」  
「？ 行くつてどこへ？」

手に持った質素な草色の上着を羽織りながら突然言い出す魔王に、  
最もな疑問を投げ掛ける。

何せ彼は魔物。行き先なんて予想が付くはずもない。あ、ここは異  
世界なのだから例え人間でも同じか。

「俺様の腹心のいる地だ。ヤツなら封印されていた間の情報を余す  
事無く伝えられるだろうし、何より今の俺様だけの” エリオラ

” じゃあ心許ない」

「えりおら？」

「エネジアを基に作られる精神エネルギーのことだ。ニンゲンの奴  
らなんか魔術を使う時、決まって使う」

おおうさすが異世界。魔術とな。

つまりエリオラは元の世界の本やゲームで言う、魔力のようなもの  
なのだろう。

「どついうワケか封印される前と比べて、エネジアから上手くエリ  
オラを練れなくなったんだ。これじゃ俺様の本来の力の半分も出せ  
やしねー」

「だから昔のお仲間に助けを求めに行くんだ」

「俺が腑抜けのような言い方をするな」

「でも間違つてはないんでしょ？」

尋ねると、魔王は整った顔を歪ませ、ぐっと押し黙った。しかし昨夜の魔物の倒しっぷりを見る限り、今の状態でも彼は十分強いと思うけど……。

あれで半分之力も出ていないとなると、本来の彼はどのくらい強いのだろう。考えると、少しだけぞっとする。

私、ほんとにこの男に付いて行っても平気なのかな。

ふとそんなことを思う。

一応相手は仮にも魔王。今更取って喰われるなんてことはないだろうけど、他の魔物は分からない。ひよっとしたら彼の仲間の中には、人間を食べる種がいるかもしれない。

まあ、命の危険に晒されてるのは、この世界にいる時点で同じことか。

現に金髪野郎という人間に、私は昨夜殺され掛けてるしね。

簡単に結論付けると私は立ち上がり、歩き出す魔王の後を追う。

ほんと、私なんでこの世界にいるんだろ。

切なる疑問が、頭の中で浮かんで沈んだ。

## 10 魔王サマの装備：ほっかむり

魔王の仲間は同じテルミオール王国内にある、バリオス山と呼ばれる山中にいるらしい。

山で生活している辺り、やっぱり魔物だなあと思う。本やゲームでも、魔物は大抵森の中とかに現れるし。ここで街中で可愛い花屋を営みながら人間と協力して暮らしてますなんて言われたら、逆に興奮めだ。

そんなことを考えながら魔王に付いてひたすら歩く。

昨夜やったように、私を担いで走ったらどうかと提案したけれど、

「あれはものすごく疲れるから、滅多なとき以外やりたくねー」とあっさり断られてしまった。

くそう、けちんぼ大魔王め。私だって、かなり疲れてきたんだけど……。

何度目かの額から滴り落ちてきた汗を手の甲で拭い、溜息を吐く。

2時間程歩いただろうか。整備されている道路とは違い、森の中はかなり歩き辛い。加えて生粋の文化部系女子である私の脚は、そろそろ限界に達しようとしていた。

全身が痛いし、制服の下のインナーは汗でぐっしょり。不快度指数150%。

しかしこの世界にも存在する太陽が頭上へ昇った頃、周囲の木々の

数が減り始め、次いで視界が開けた。  
青っぱい草の匂いを含んだ風が、そよそよと汗ばんだ身体を撫でる。  
目の前にはただだっ広い平原が広がっていた。

「やつと森、抜けたんだ〜」

次の瞬間、私は地面にへたり込んでいた。

もう無理。歩けない。こんなに歩いたのはいつぶりだろう。中学校の林間学校での登山以来だろうか。

「おい」

「ん？ ぶほッ!？」

掛けられた声に反応して横に立つ魔王を見上げると、ばふっと、突然視界が闇に包まれた。加えて何だか息苦しい。  
一体なんだと驚いて、顔面目掛けて投げ落とされたそれを剥ぎ取る。

「……なにこれ」

「見りゃわかんだろ。服だ」

そりゃわかるけど。

私が今持っているのは、先程まで魔王が着ていた服の上着の方だった。  
た。

腰までの丈の、年季が入ったアウター。生地は分からないけれど、

肌触りは元の世界の綿に似ている。

「さっきも思ったけど、この服どうやって調達してきたの？」

「その辺で見掛けた人間からかっぱらってきた」

「なッ……！」

追い剥ぎか！ どの山賊だよ！

「それ、完全に泥棒じゃん！ 窃盗罪で逮捕されちゃったらどーすんの」

「ああ？ マモノ相手に逮捕もクソもねーよ。それに俺様が風邪でも引いたらどうすんだ」

「馬鹿は風邪引かないって言うじゃんか」

「それは俺様が馬鹿って言いたいのか？」

「べっつに〜」

ふてぶてしい態度で答え、私は自分の両腕へと視線を向けた。

昨夜魔物に付けられた傷が、生々しく残っている。あれのお陰で縄は解けたが、その代償はなかなかだ。セーラー服の袖の部分なんて、綺麗に裂かれてしまっている。

服かぁ……

元の世界に戻ったら新しいの買わなきゃなあ……。

それ以前に戻れるかどうか不明なだけで。どちらにせよ、今着ている制服は長く着ていたくはない。見目悪いし。

もし洋服が手に入る機会さえあれば（追い剥ぎ以外で）、すぐにも着替えたい気分だった。

取り敢えずボロボロになった袖部分は、捲り上げる事で応急処置をしておく。

「とにかく、街に入るのに、そんな格好だと目立って仕方がねーだろーが」

「街？」

言われて、私は前方へと視線を向ける。

さっきは森を抜けられたことにほっとして気付かなかったが、遠方にクリーム色の外壁のようなものが見えた。なるほど。あれが街か。

確かに街中で今着ているセーラー服でいたら、それはそれは目立つことだろう。けど、

「なんで街に寄るの？ あんたのお仲間がいる山に行くんでしょ？」

「まあそうなんだけどよ。部下と久々の再会なのにこの薄汚い服はねーだろ。ってなわけで服を買いに行く」

くすんだ草色のシャツを示しながら言う魔王。よくよく見れば両腕の丈も短い。

ううむ、確かに。特別センスが良い訳ではない私から見ても、彼の

今の姿はみすばらしかった。

悔しいが、顔は良いから何を着ていても格好良くは見えるんだけど。少しばかりサイズの大きい上着を羽織りながら、私は魔王を凝視する。

うん、ほんと顔は良い。人外って言葉通り　　って……

「そう言えばあんた人間じゃないじゃん。街って入れちゃうの？」

昨日襲ってきた獣のような魔物は私を殺そうとしたし、魔物の中に人間に危害を加える種がいるのは明らかだ。

今遠方に見える外壁も、魔物等が街の中に進入するのを防ぐためのものだろう。容易に入れるとは思えない。けれど魔王はしれっとした顔で。

「俺様は見ての通りニンゲンに姿が近いからな。大丈夫だ」

「そ、そんなあっさり。根拠でもあるの？」

「昔仲間と何度もニンゲンの住む村や街に行っては、食事や買い物をしたからな。実証済みだ」

「へえー……」

食事の内容は敢えて考えず、私は納得する。

確かにぱつと見はただの美形すぎる兄ちゃんにしか見えない。街中で出会っても彼が魔物だとは、普通の人間なら思わないだろう。けど……

「いででででででッ。てめ、なに、しやがんだ！」  
「あ、……ごめんごめん。つい手が出ちゃったよ」

気付いたら背伸びして魔王の両耳を引っ張っていた。

私が慌てて手を離すと、魔王は若干涙目になりながら両手で自らの両耳を摩る。

そんなに強く引っ張ってたかな？

「でもさ、その耳だとすぐに人間じゃないってバレちゃうよ？」  
「あ？」

摩る手を止め、次いで魔王は訝しげな表情のまま、しなやかな指で自分の耳の形を確かめる素振りを見せる。そしてぴたりとフリーズした。心なしかその綺麗な顔には脂汗が浮いているように見える。自分の耳のことも忘れていたのか。意外とうっかりさんなのかもしれないな。これまで街に侵入していた時は一体どうしていたのだろうか。

そんなことを考えつつも、私は何か魔王の尖がった耳を隠すものはないかと思案する。

お、これなんてどうだろう。

「ちよつとちよつと」

「？ なんだよ」

未だに両耳に手を添えている魔王を手招きして、少し腰を屈めてくれるよう頼む。

目の前に現れた魔王の綺麗な顔に一瞬うろたえつつも、私は今し方解いたばかりの制服のスカートを彼の頭へと被せた。きよとんとした顔をする魔王を無視しつつ、続けて三角形の底辺を彼の顎の下へ引っ張り、きゅっと結ぶ。

「うん！ ナイスほっかむり」

田舎のばあちゃんスタイルと、異世界の美形魔王との夢のコラボ実現だ。自分でやっておいてなんだけど、もんのすぐください。

笑顔で親指を立てながらも、内心笑いを堪えるのに必死だ。

けれどこれなら耳は、一応すっぽりと赤茶色のスカートの下に隠れている。問題は魔王が果てしなくくださいこのスタイルにキレないかどうかだけ……

「……これはお前の世界で流行っているのか？」

「へ？ ええと、まあ、一部では……」

お年を召した方々や農業に従事している方々の中では、まあ流行っているのだろう。嘘は吐いてないはず。

「ふーん……そうなのか」

それだけ呟くと、魔王はさっさと街の方へと歩を進め始めてしまった。

え、なにに。だっさいほっかむりに関する文句は一切無しですか。そのまま行っちゃうんですか。

慌てて後を追いながらも、私はスカートの巻かれた魔王の後ろ頭を凝視する。

度々頭に手を伸ばしては、彼はスカートに隠れた耳元等を落ち着きのない様子で触っているようだった。

ええと、

もしかして気に入ったのかな……？

ほっかむりが。

気に入ったとまでは行かなくても、今すぐひっpegがしたくなるほど不快な気分にはならなかったらしい。

意外な反応だ。てっきり「魔王の俺様がこんなもん被ってられるかッ！」とか言って付き返されると思っていた。

私の厚意（？）が受け入れられたと分かって、何だかくすぐったい気分になる。

前に行く見慣れた赤茶のスカートを見つめながら、私はくふふとこっそり笑みを零した。

## 11 色々な意味でキャパオーバー

地面に敷き詰められた石畳。

周囲に立ち並ぶ巨大な建物は、どれも煉瓦や木や砂で出来た、一昔前のヨーロッパ式。

せわしなく道を行き交う大勢の人々。彼らもまた最初に出会った人達のように、世界史の教科書や文献で見るとような中世ヨーロッパ風の格好をしている。

大通りの両脇には、見たこともないような食材らしきものを売っている露店が立ち並んでいて、呼び込みをする店主の声や人々の話し声があちこちで盛んに響いていた。

にぎやかだなあ〜。

この世界に来て初めての街だ。目に入るもの全てが新鮮で、ついキョロキョロとあちこち見回してしまう。

「おい、そんなフラフラしてると道に迷うぞ」

前を歩き、こちらへ振り返りながら魔王（装備：ほっかむり）が忠告してきた。

こうして見ると、本当に人間にしか見えない。実際この街の外壁に在る関所でも、鎧兜を装着した兵士らしき人達が立っていたが、特別呼び止められることもなく通過することが出来た。

捕まらなくてよかったとは思っけど、その反面こんなに警備が手薄で良いのかなと心配になる。魔王のように人型の魔物が街に侵入したら、人間なんて襲い放題じゃないか。まあ、この世界での魔物への対策がどの程度進められているかなんて、私が知ったこっちゃないんだけど。

ぐくぐくぐくぐく

「ッ……!？」

突然自分から発した重量感のある音に、私は咄嗟に両手でお腹を押さえた。けれど目の前の魔王には聞こえてしまったらしくて。

「腹が減ったのか」

くるりと振り向き言ってくる魔王に、羞恥心で顔が熱くなるのを感じる。それを隠すべく私は唇を噛み締めながら俯いた。

……しょうがないじゃんか。だって昨日の昼に学校で食べたお弁当から、なんにも食べてないんだから。ぶっちゃけると昨夜眠りに就く直前までも鳴り続けていたよ。ちくしょう。

「……服の前にメシにするか」

そう言うと魔王はつかつかと何処かへ向かって歩き出した。食事の場へ連れて行ってくれるらしい。うう……相手は変態野郎なのに、何だか一瞬後光が見えたよ。

そう言えばこっちの世界に来て初めての食事だ。何か珍しいメニューとかあったりするのかな？

等と浮き足立つのも束の間。

「あ、ねえお金は！？ こっちの世界でも何か買う時はお金がいるんでしょ？」

先程辺りを見回していた時、露店で果物らしきものを買う女性が引き換えに銀貨のようなものを手渡していたのを思い出した。

しかし前を歩く男は昨夜100年の封印から解かれた魔王だ。お金など一銭も持ち合わせていないに決まっている。

けれど魔王は得意げな様子で、

「今朝服を奪ったニンゲンから盗ってきた。メシ代と服代くらい、あるだろう」

ポン、と最初から履いている、真っ黒なロングパンツのポケットを叩きながら言われた。私は顔を歪ませずにはいられない。

こ、こいつ、昔からこうやってお金を稼いでたんじゃないだろうな。……いや、きっとそうだろう。だって魔物が人間の通貨を得るため

に人間と一緒に働いたり出来るとは思えないし。盗む以外に方法はない。

窃盗金で腹を満たすなんて、私はいつからこんな不良になったんだろう。普通だったら即効観察処分だぞこれは。いや、奪った相手に危害を加えたとしたら下手したらネンショー行きかもしれない。ぞぞぞ。

そんなこんなで人の波の中を暫く歩いてみると、不意に前に行く魔王の足が止まった。どうやら目的の場所に着いたらしい。

目の前に建つのは周囲に連なって建つものよりも赤茶の煉瓦が目立つ、洒落た雰囲気建物だった。壁面から看板が出ていることからここがお店だということが分かる。

魔王が木製の扉を開けると、香ばしい良い香りが鼻腔を刺激した。レストラン……と言うのか分からないけれど、ここは食事所のようにだ。

店内には昼時だからか、結構多くの客がいた。各々テーブル席やカウンター席に腰掛け、楽しげな話し声を響かせている。外装がそうならば、内装もヨーロッパ風で。さほど高い店ではなさそうだけど、何処か上品な雰囲気が漂っている気がした。

魔王は空いたテーブル席を見つけると、乱暴な態度でそこへ腰を下ろした。私も慌てて彼の向かいの木製の席へと座る。

「ほら、お前は何食うんだ」

「あ、うん。ええと……」

羊皮紙が束になったメニューと思しき物を魔王から受け取り、しげしげとそれへと視線をくばせる。

よ、読めないし……。

何ということだろう。言葉が通じるから、てっきり異世界トリップ特典「言語翻訳能力」が作動していると思つたのに。

色あせたメニューに並ぶ文字列は、見た事もない奇怪な形をしていた。全く解読出来ない。

ん？ ちょっと待てよ。

ということとは、こつちの世界で私は本を読む事が出来ないのか！？ 私の数少ない趣味だというのに！ 一体どうしてくれよう。

悶々とそんな事を考えながらメニューと睨めっこしていると、魔王が私の様子に気付いたようで

「なんだ。どれを食べるか決められねーのか」

「！ ……ちがいますー。字が読めないんですー」

「……へえ、言葉は通じるのに字は読めねーってか。面倒なモンだな」

「改めて言わないでよ。へこむから」

ジト目で魔王を睨むが彼は意に介した様子も見せず、ヒョイと私の持つメニューを取り上げた。

続けてロングスカートを身に纏った女性店員を呼ぶと、スラスラと聞いた事のない料理名を口にする。髪をお団子に纏めた店員のその顔は心なしか赤く見えるが、不思議そうな色も浮かばせている。そりゃまあ超絶美形男子がだっさいほっかむりスタイルだからね。誰だって奇妙な顔をせずにはいられないだろう。

注文を終え、店員が厨房の方へ戻って行くのを見やった後、私は口を開いた。

「魔物って、みんなあんたみたいに文字を読めるの？」

周囲の客に聞こえたらまずいから。少しばかり声を落として尋ねると、魔王はこちらへ視線を戻し、何かを哀れむような目をした。

「お前、ほんとに何も知らねーのな」

「あ、当たり前でしょ！ 昨日の夜この世界に来たんだから」

「そう言われりゃそうか。……全員が全員ってわけじゃねーけどな。俺様みたいにある程度の知能が備わって尚且つそれを伸ばそうとする意欲があるヤツは、大抵読めるし、しゃべれる。世界共通語であるセラ又語を知っていればこうして街に侵入したり、人間に化けた時とかに、色々と便利だからな」

「ははあ、なるほど」

つまり昨夜襲ってきた豹のような魔物は、知能が備わっていきそうになかったから、恐らく文字は読めないのだろう。

どうやら魔物は人間と違って、それぞれ固体ごとに知能や体の機能が違うらしい。まさか魔物全員の食事がキスなわけないし。仮にも

しそつだつたら総称を色欲魔物と改名せねば。

程無くして料理が運ばれてきた。

木製のテーブルの上が、見た事のない品々でいっぱいになる。

「ちよつと多すぎない？ 私こんなに大食いじゃないよ」

「俺だつて腹が減つてんだよ。今朝だれかさんが食事を妨害してくれたお陰でな」

嫌味を含んだ物言いを無視して、私は視線を魔王からテーブルの上の料理へと移した。

サラダらしきもの、パンらしきもの、グラタンらしきもの。似通つてはいるがどれも見た事のない料理ばかりだ。

取り敢えず私は一番手前にある、乳白色のスープを口に運んだ。

おいしい……！

見た目はクリームシチューに似ていると思つたけれど、その味はチーズ&チキンといった感じだ。とろりとした舌触りが何ともたまらない。

空っぽの胃袋を満たすべく、私は夢中でスープを咀嚼する。

チラリと魔王の方へ視線をやると、彼もパンらしきものを頬張っているようだった。

てか人間の料理も食べるなら、キス………というか、エネジアだったっけ？ 人間の生気なんて必要ないじゃないか。

何だか腹が立つたから、私もパンらしきものを引つ掴み、豪快に頬張る。香ばしいバターの香りに、ふわっふわで弾力のある生地。めちゃめちゃおいしい！　っていうかこれはパンだ。らしきものじゃなくてまぎれもなくパンだ。懐かしき味！  
もつきゅもつきゅと頬張っていると、不意に視線を感じた。正面を見やると、魔王と目が合った。

「なにふあ、じふおじふおみへ」

「なに言ってるかわかんねーよ。てか口に入れすぎだろそれ」

「ひょーふあふあいれひよ。おふあふあふあへっへんばふあふあ」

「だからわかんねーって。……………やっぱ似

てねーか」

「??？」

魔王が何か言った気がしたけど……………気のせいかな。

まあ大したことではないだろう。言っていたとしても嫌味が悪口だ。ぜったい。

自分の中でそう処理して、ゴクリとパンを飲み込む。

「っーかセラ又語が読めねえといいー一般常識も知らねえといい、お前、ほんとに何でこの世界に来たんだよ」

「来たんじゃないかって連れて来られたの！　昨日だってあなたに訊いたでしょ、元の世界に帰る方法しらないかって」

「んあの覚えてねーよ。てか連れて来られたにしても、誰に、何のために、どうやって連れて来られたって言うんだ？」

「そんなの私に分かるわけな」

……いや。分かることは、ある。

そうだ。これまで突然の異世界トリップとか魔物とか命の危機とか、色々なことで思考回路が占領されてて深く考えられなかった。いや、考えたくなかった。

私がどうして、この世界に連れて来られたのか。

私は図書室で見つけた本の光に引っ張られ、気を失った。で、気付いたら森の中。

つまり、たまたま私があの本を見つけて開いてしまったから、私は本に異世界へと連れて来られた……ということになる。

加えてあの本があつたのは学校の図書室。高校の生徒ならば誰でも利用する場だ。

じゃあ私じゃない誰かが見つけても、同じようなことになっていたのだろうか？

私じゃなくても、よかつたのだろうか？

そこまで考えて私はかぶりを振る。

いやだ。冗談じゃない。

そうなると私は、いよいよこの世界での存在価値がなくなってしまうんじゃないか。

仮に自分が小説や漫画でよくある、救世の勇者や巫女のような何かとして召還され、この手に世界の命運が握られているとか、そういうことだったら話は別だ。

けど、私は偶然本を見つけて結果的にこちらの世界へ勝手に迷い込んでしまった拳句、魔王の封印を解くという行為を犯した。選ばれた者なんてもんじゃない。

私はこの世界で望まれていない、存在だった。

世界と世界の境界線から飛び出し、禁じられた行為を犯した、いてはいけない存在なのだ。

「おい、どうした」

魔王の声で我に返った。

一口かじっただけのパンをわし掴みにした状態のまま、私は固まっていた。その手は我知らず震えている。背中を冷たい汗が伝った。

「……きもちわるい」

「はア？ ……お前バカだろ。あんだけ一気に食やそーなるに決まっつてんだろーが。ここでゲロるなよ？」

私は席を立った。

「……………かえる」

「……………は！？ なに言ってるんだおま」

「家に帰るの！ ついて来ないで！」

「！ ちょ、おいコラ待て！ 並み顔女！」

扉へと走り、外へ出る。

魔王の呼ぶ声が聞こえたが、無視した。だって私の名前、美夜だし。並み顔女じゃあないし。

この世界には、私の名を呼ぶ人はいない。

私の居場所はない。

存在理由も、ない。

私はどうして、この世界にいるの？

## 12 病み期到来

ほてほてと、知らぬ街の大通りを歩く。

空が青い。青くて、広い。

地球のものと瓜二つなこの空の下に、私の知る人は誰一人いない。知っている地もない。

この世界に、私は独りぼっち。

帰る場所なんて、ハナからないのにね。

勢いに任せて飛び出してきてしまった。

チラリと来た道を振り返ればまだ辛うじて先程いたレストラン（？）が見えるが、魔王が自分を追って来る様子はない。

こちらとは別の方角に向かって私を追って行ったか。もしくは私なごに構わず、料理を食べ続けているか。……有り得る。まあついて来るなど言ったのは自分なだけどき。

小さく息を吐き、再び空を見上げる。

帰る場所なんてないことは、最初から分かっていた。次元が違うのだ。

この街を徘徊したからと言って、家に帰れるわけではない。けど、理性でそう分かっている、飛び出さずにはいらなかった。

怖かった。

見知らぬ異世界で拒絶されて、存在理由を見出せなかったことが。丸裸で真夜中の海に放り込まれたような、そんな気分だった。ただでさえこの世界との繋がりが、土台が、私にはないのに。その上世界を破滅へと導く存在とか言われて突き放されて、恐怖心を覚えなないわけがない。現に魔王の封印を解いてしまい、私の恨まれるべきポジションは確立しちゃったわけなんだけど。

昨夜の白装束集団を思い出し、ぶるりと身震い。

そうだ。すっかり忘れていた。

私は昨夜、人間にも殺されかけたんだった。

あの顔だけ美形の金髪野郎に堂々と公開処刑宣言をされたのを、偶然現れた魔物と、あの魔王のお陰で何とか回避したのだ。

っていうか、よくよく考えたら自分は追われる身なんじゃないか？逃げてきちゃったわけだし。きっと今頃、金髪野郎たちは私と魔王を血眼になって探しているだろう。

ほんと、絶望的な状況ってのはこのことだよなあ……。

はふうと溜息を吐いた後、何となしに正面へ視線をやる。そして、私は凍り付いた。

し、白装束……！？

大通りの正面から神父さんのような教会関係者らしき男が2人、歩

いて来ていた。

昨夜金髪野郎たちが着ていたのと、ひどく似通った白装束の服だ。私たちを追って来た、奴らの仲間だろうか。

我知らず心臓が早鐘を打ち始める。

だいじょうぶ。だいじょうぶだ。落ち着け、私。

まだ奴らの仲間だつて決まったわけじゃないし。

仮にそうだとしても、今は上着で制服は隠れているし、昨日あの森の中は真っ暗だった。最初に出会った金髪野郎とオッサン2人以外、私の顔はよく見えなかつたはず。

私が魔王の封印を解いた、異界の人間だつてことは分からない。ぜつたい。……たぶん。

小さく深呼吸した後、極めて平静を装い、彼らが向かつて来る方向へ歩を進める。

大丈夫とは分かつていても、顔は念のため伏せて　　って、

げえッ!?

靴、上履きのままじゃなかあ！　視線を落とすまで全然気付かなかつた。

いやいや、でも周りにこれだけ人がいるし。いちいち他人の足元なんて見ていないだろう。

だいじょうぶ、だいじょうぶ、だいじょうぶ………

気付いたときには右向け右。

私は白装束の二人組とすれ違うより前に、右手に見えた薄暗い路地

裏へとほぼ直角カーブした。

はい、逃げたとも言います。だって万が一ってこともあるじゃないか。私は慎重な女なのだ。チキンとでも何とでも言いやがれ。

数歩進み、大通りの喧騒が遠くなった場合にチラリと後方を振り返る。

明るい大通りを、白装束の男二人が通過して行くのが見えた。私のことには気付いていないと思う。私はほっと胸を撫で下ろした。

しかしこれからどうしようか。

人通りの少ない……というか全く無い、両サイドの建物によって日光の遮られた道を進みながら考える。

魔王の元へ戻るのも、あんな態度をとってしまった建前し辛い。いや、それ以前に理不尽にぶちギレた私のことなんて忘れて、彼は既にこの街から去っているかもしれない。

あれ、もしかして今ヤバい状況……？

さあぁっとお腹の辺りが冷たくなるのを感じる。

あんな態度をとられたら、怒らない訳がない。っというか、私だったら怒る。いや、怒るを通り越して呆れるだろう。そして呆れて私みたいなしょうもない奴なんて放っておいて、何処かへ行ってしまっつかも。

どうしよう。

こんな知らない街に放置されちゃたまらない。

それ以前にここは異世界。道なんて到底分からないし、お金も無い。字も読めなければ、一般常識も分からない。加えて魔物や私を追う白装束集団の存在。命の危険に晒されることなんて常だ。そんな地で、こんな小娘一人で生きていける訳がない。

戻らなきゃ。謝らなきゃ。

今度ははっきりと、そう思った。

保身的な考えだけけれど、私が今頼りに出来るのはあの男だけ。今彼に見捨てられてしまったら、飢え死にか、魔物に殺されるか、果ては金髪野郎に首ちょんぱか。いずれにせよ、死という最悪のゴール地点が目に見えている。

許してくれるか、分かんないけど。まだあの店にいるかも、分かんないけど。

くるりと踵を返し、大通りの方へ向かって駆け出す。

バンッ

「へびッ!?!」

全身に衝撃が伝わると同時に、脳裏には火花が散った。一体なにが起こったのだろう。私はつい5秒程前までは大通りへ向かって走っていたと言うのに。それが今は薄暗い路地裏に倒れ込んでいる。加えて体の左半分がものすごく痛い。ズキズキ痛むぞ。こんちくしょーめ。

「すまない、無事か？」

ゴツゴツとした石畳に頬を寄せながら痛みに悶絶していると、頭上から声を掛けられた。ちらりと視線を向けると、視界に入るのは自分の脇に佇む白い靴を履いた脚と開け放たれた扉。嗚呼なるほど。この人がその家から出て来て、丁度扉の前に走って来た私がいたのか。んでもってクラッシュしてわけね。どんだけタイミング悪いんだよ自分。

「あ、はい。だいじょうぶです……ありがとうございます」

私に激しい一撃を喰らわせた何者かが手を差し出してくれたから、お言葉に甘えてその手に自らの手を重ね合わせる。が、同時に私の脳内はフリーズした。だって、その手の主の顔を見てしまったから。

襟足まで伸ばした金色のブロンドヘア！。

目鼻立ちの整った顔。

エメラルドグリーンの切れ長の瞳は、驚いたように見開かれている。しかし次の瞬間、その瞳は鋭く歪められ、

「ッ……いたッ!？」

「漸く見つけたぞ。貴様、昨夜はよくもやってくれたな」

手首を掴まれ、私は男に無理矢理引き立たせられた。

なんとということでしょう。

金髪野郎と、感動の再会。ぐはあ。

### 13 不器用な優しさ

私はどれだけ運が悪いのだろう。

偶然立ち寄った街の路地裏に偶然入り込み、偶然ここに位置する建物にいた金髪野郎が、偶然今のタイミングで外へ出てきたとか。ほんと、神様に嫌われているとしか思えない。

「やはりこのハルディアで張っていて正解だった。こうして貴様と再会できたのだからな」

へえ、この街ハルディアって言うのか……って、んなこと言うてる場合じゃない！

私は慌ててかぶりを振る。

とにかく今は逃げなきゃだ！ 何せ相手は金髪野郎。このままじゃ何されるか分かったもんじゃない！

両手首は金髪野郎の白い手に強く握られながらも、私は何とか逃れようとぶんぶん腕を振り回す。が、全く振り解けない。

焦って金髪野郎を見上げるが、顔を歪ませている私とは対照的に、彼は無表情。全く動じている様子が無かった。

背中から嫌な汗が伝い落ちる。

魔王と違って華奢だし、もやしっぱいから簡単に逃げられると思っただのに……！

思わず顔を引き攣らせた私を見て、金髪野郎は僅かに口角を持ち上げる。

「逃げようとしても無駄だ。この街には私の部下や仲間が他にも大勢張り込んでいるからな。例え逃亡を謀ったとしても私が貴様の容姿を証言すれば、彼らが再び貴様を捕らえる」

やっぱりさつき大通りにいた白装束は、こいつの仲間だったようだ。絶えず身を擦じらせながらも、私は彼の言葉に納得する。

けど今のこの状況はやばい。かなりやばいぞ。

悲鳴を上げるにしても、私は仮にも「預言の娘」なんて呼ばれている逃亡者。現に魔王の封印を解いてしまっている身だし、街の人が助けてくれるとは到底思えない。

加えて唯一の望みである魔王も、例によって助けに来てくれる訳がないし……。

金髪野郎が周囲を見回しているのを良いことに、焦燥感に駆られながらも私は思考を巡らせる。

「……魔王の姿が見当たらないが……まあ、ハルディアの近辺に未だいることは間違いないだろうな。貴様を上層部へ受け渡した後、搜索の手配をさせよう」

そう呟くと、金髪野郎は踵を返して大通りへ歩き出そうとする。  
うああやばい！ な、なんとかしないと！

「ね、ねえ！ あんた達は、一体何者なの？」

びくり。

私の両手首を握る彼の手が僅かに反応した。

私から質問されるなんて予想外だったのだろう。私もどうして咄嗟にこんな言葉が出たのか分からない。

切れ長の目は驚いたように見開かれた後、怪訝そうな色を含ませた。

「何故そんな事を訊く。貴様には関係のない事だろう」

「ご、ごもつともです。」

けどそれを言われたら終わりなわけで。

「何となく、気になったから。知的好奇心ですよ」

頭をフル回転させて、精一杯の言葉を紡ぎ出す。

心臓の音が、遠方から聞こえる喧騒までもを掻き消さんばかりに鳴り響いている。制服の下は冷や汗でぐっしょりだ。

金髪野郎は暫く訝しげな視線で私を見下ろしていたけれど、小さく

息を吐いた後、口を開いた。

「どちらにせよ、貴様はこの後殺してしまう訳だしな。減るものでもないだろう」

うわ。いま何気にさらりと怖いこと言ったよこいつ。

ひやりと胃の辺りが冷たくなる。

思わず恐怖心が顔に出そうになるのを慌てて堪えて、私は平静を装いつつ再び金髪野郎の言葉を待った。

「私達はラディウスの一員だ」

「らでいうす？」

「滅魔隊と呼ぶ者もいる。魔物退治を主な職務とする公的機関の総称だ」

なるほど。滅魔隊か。

それなら魔王と封印を解いてしまった私を、これだけ執拗に追い回す理由も分かる気がする。魔王って言ったたらそのまんま”魔物の王”だし。

それにしても魔物退治を専門に請け負う職業があるなんて。やっぱり世界が違うんだな、等と改めてしみじみと思ってしまう。

「公的な設立は近年だが本部のある隣国、ガルヘルム帝国からこのテルミオールまで勢力は着実に広がっている。ガルヘルムはラディ

ウスの存在によって国家財政が成り立っていると言っても過言ではない」

「へえー。そんなにすごいんだ」

思わず感嘆の声漏れる。

予想以上にちゃんと金髪野郎が答えてくれて、意外に思ったのもある。根が真面目なのかな。

「ああ。魔物退治や魔除けの護符の生産が主な収入源だが、稀に多額の報酬が得られる仕事も請け負う」

「？ 魔物退治より沢山お給料がもらえる仕事ってあるの？」

尋ねると、突然金髪野郎の纏う空気が変わった。

な、なに！？ 興味本位で尋ねただけなのに。

私は我知らず体を硬直させる。

不意に、掴まれていた両手を勢い良く引かれ、金髪野郎の顔が至近距離にまで近付いた。驚きと、目の前の美貌に心臓が跳ね上がる。

エメラルドグリーンの整った双眸は、暗い陰を帯びていた。同じように整った唇が、僅かに動く。

「貴様のような魔物に加担した人間を、処罰する事だ」

低く、静かな声色で囁かれ、私の体は反射的にびくんと跳ねた。なるほど、そういうことか。なんて、納得している余裕はない。い

よいよもってやばい。そう悟った。

金髪野郎は硬直する私を一瞥すると、近付けていた顔を離した。

「くだらん話は終わりだ。そろそろ行くでしょう」

私の片手を解放し、もう他方の手首を握ったまま、金髪野郎は今度こそ大通りの方へ向かって歩き出した。突然の事だから足がもつれて一瞬バランスを崩しかけたけれど、何とか踏み止まり、私も腕を引かれるままに歩き出す。けれど私の小さな脳みその中はパニック状態。

どうしようどうしようどうしようどうしよう

こんな街中、昨夜のように魔物とかが都合良く現れるなんてこと、あるわけないし、さっき考えたように、誰かが助けてくれるなんてことも有り得ない。金髪野郎にも、力で敵う筈がない。

「ちよ、ちよっと………！」

辛うじて声を発せたが、それはあまりにも頼りなげで。金髪野郎にも聞こえているかいないか、反応はない。つかつかと、規則正しい足取りで薄暗い裏路地を進んで行く。一步一步進むごとに、私の頭の中は絶望色に染まっていった。

じんわりと、目頭が熱くなる。

殺すとか、殺されるとか、そんなの元の世界での私には無縁だったし、正直今でも現実味が沸かない。きつとギロチン台か何かに上らされるまで、平凡女子高生である私は死の現実を受け入れられないと思う。

それより、この世界で自分はいらない存在で、この金髪野郎達にとっても邪魔な存在という事実の方が辛かった。

だったら、本当に私は何のためにこの異世界にいるんだろう。

こうして殺されるためだけに、私はこの世界へ迷い込んだってことなのかな。

私が殺されたら、この世界は喜ぶのかな。

……でも……

ぐつと、涙を飲み込む。

そんなの、冗談じゃない。

預言とか、封印とか、そんなの私には知ったこっちゃないことなんだ。

そんな理由で殺されたらたまらない。

私はまだ、死にたくない。

まだまだ人生楽しんでないんだ。

もう一度家族に会いたい。友達に会いたい。

元の世界に帰りたい……！

路地裏に衝撃音が響いた。何か重いものが、コンクリートの上に落とされたような、そんな音。

金髪野郎の足が止まった。つられて私も立ち止まる。

音の元は私達の進行方向から聞こえたようだった。その証拠に金髪野郎はじつと前方を見据えている。一体何なんだろう。

金髪野郎の背中で遮られた前方を、私は身を乗り出して覗き見た。

赤茶のほっかむりから覗く、漆黒の短髪。鋭く整った赤い瞳。筋肉質だけどスラッとした長身の体格。

肩に巨大な麻袋を担いだ魔王が、路地裏の行く手に佇んでいた。

「どっして……」

信じられない、という気持ちでいっぱいだった。だって私、あんな理不尽なキレ方して、魔王に当たって、拳句の果てに勝手に店を飛び出して

「貴様……魔王だな」

金髪野郎が沈黙を破った。私の手首を握る手に、僅かに力が籠る。

「そういうお前は何モンだ？ それ、俺様の専用食なんだけど。勝手にどこへ連れてく気？」

ふてぶてしい態度の魔王に、金髪野郎は一瞬閉口する。どこまで会話が成立するか、凶っているようにも見えた。

「……この娘はセリナー ज्याを破滅へと導く存在。加えて貴様の封印を解いた。よってこの後ラディウス上層部へと受け渡し、処刑する」

淡々と金髪野郎が告げると、魔王は僅かに眉を顰めた。

「なるほどな。お前も”ヒューバート”と同じ人種ってわけか」  
「！ 何故その名を」

「知ってるに決まってんだろーが。同じ時代に生きていたんだからな。軟弱なクセして頭ばかり回る、嫌な奴だったぜ」

悪戯っぽく笑む魔王。

私には二人が何の話をしているかさっぱり分からない。けど、金髪野郎は魔王の言葉に憤りを覚えたようだった。無表情ではあるが耳の辺りが紅潮し、肩は小刻みに震えている。

「……ヒューバート様を侮辱するか、魔物の王。どちらにせよ貴様はこの娘の処理をした後、我々の手で滅するつもりでいた。ならば多少事が前後しても支障はない」

そう言うと、金髪野郎は私を拘束していない他方の手を懐に伸ばし、

「今ここで果ててもらおう！」

何か紙切れのようなものを魔王へ向かって投げ付けた。

魔王はひらりとそれを避けて体勢を整えると、目にも留まらぬスピードで私達の方へと駆け出す。と同時に全身を強い衝撃が襲った。気付くと私は石畳の上に尻餅を付いていた。どうやら金髪野郎に後方へと突き飛ばされたらしい。

慌てて立ち上がるのと、私は前方を見据える。と、さっき金髪野郎が投げたらしいひし形紙切れが石畳の上に落ち、か細い黒煙を上げているのが見えた。

え、あれただの紙切れだよな！？　なんで石畳溶かしちゃってんの！？

目の前の状況にぎよつとするも束の間。

風を切るような鋭い音が路地裏に響いた。驚いて視線を向けると、丁度金髪野郎が魔王に回し蹴りを喰らっている、アクション映画さながらの光景が飛び込んできた。

い、痛そ〜……。　

蹴りは完全に首の後ろに入っており、金髪野郎の瞳はかつて無いほど見開かれている。ぐらり、と白装束を纏った長身が傾いだと思うと、彼はその場へ勢い良く倒れ込んだ。

5秒、10秒経っても起き上がる様子はない。完全に気絶してしまったようだ。

なんだ、弱いんじゃないか……っていうか、魔王が強すぎるんだな。うん。

命が助かったことにほっとしつつ、気絶している金髪野郎を何故か気の毒にも思った。きっと弱くはないんだろうけどな。

そんなことを考えていると、不意に全身に陰が落ちた。見上げると魔王がすぐ傍らに佇み、私を見下ろしていた。

「あ…………ええっと…………」

気まずい。思わず視線が泳ぐ。

謝ろうと思っていたのに、本人を目の前にと上手く謝罪の言葉が出てこなかった。

食事所での私の態度を思い出す。怒っていないわけがない。

けど、こうして助けに来てくれたんだし。お礼も言わなきゃだし。ちやんと、話さなきゃ。

意を決して魔王と視線を交え、口を開く。

「…………ごめんなさい」

「…………は？」

魔王はぱちくりと目を瞬かせている。

「なんか勝手にキレて、お店飛び出して、あんたにも…………当たっちゃって…………」

尻すぼみになりながらも、謝罪の言葉を述べる。

「言い訳にしか、ならないけど。…………怖かったの。…………世界を破滅

に導く存在とか言われて異世界で拒絶されて、私の、この世界での、存在理由を見出せなかったことが」

声が震える。

魔王は黙っているから、聞いているのかいないのか分からない。

「どうして自分はこの世界にいるんだろう。殺されるために自分から迷い込んだのかな。そうじゃなかったら私には一体何が残るんだろって、色々考えちゃ　　んうッ!?」

突然魔王に胸倉を掴まれ、強引に唇を重ねられた。

突然の出来事に頭が真っ白になる。

と、突然何事!? 私さっきまでシリアスな空気で話してたんだけど! それが急に魔王の顔が近いんだけど! 無駄に整った顔が目の前にあるんだけど! てか何でさっきの流れからキスなわけっ!? 慌てて魔王の胸に手を添えて、押し離れようと力を入れる。が、びくともしない。それどころか逆に頭を抱え込まれ、深く口付けされた。

嗚呼ちくしょう油断した。今朝から貞操(?)を守っていたのに、とうとう奪われてしまった。や、正確に奪われてるのは エネジァ 生気なんだけ。

熱い吐息と共に、自分の身体の奥の何かが、喉から合わさった口元を通して抜き取られて行くのを感じる。次第に全身の力が抜け、頭

の芯が熱を帯び始めた。

いかん。やばい。苦しい。酸素が、酸素が欠乏中。せつかく命が助かったのに、キスで窒息死とかマヌケすぎる。

あまりに長い口付けに意識を手放しかけた矢先、漸く唇が解放された。

息が絶え絶えなのは言うまでもなく、例によって全身に力の入らない私は再びその場へとへたり込んだ。

「い、いきなり、なに、すんのさ」

「なにつて、腹減ってたから。あと救助賃？ まあ安いモンだろ」

微笑を浮かべながらペロリと唇を舐める魔王に、私の顔はカツと熱くなる。

「だからって……マジメな話してたのに」

そこまで言って、言葉を呑み込んだ。

魔王が徐にしゃがみ込み、彼の大きな手が私の頭の上に添えられたから。

え、一体どういう状況？ これ。

「お前は、俺様の専用食だから」

「……はい？」

言っている意味が分からなくて小首を傾げると、魔王の顔に陰しさが走る。が、その頬は僅かに赤く見える。だから一体何なんだ。

「だから！ 俺様はお前がこの世界に来たことで封印から解放されて、腹もふくれて、少なくとも……その……助かってる、から。それでいいだろって言ってるんだ！」

撫でるを通り越してわしゃわしゃに私の髪を掻き混ぜながら、魔王は捲し立てる。

……ええと、つまり……存在理由とか、そういうのに悩んでるんだっいたら、自分が必要としているから。気にするな、ということなのだろうか。

くしゃくしゃになった髪を整えながら魔王を見上げると、その顔はかなり赤い。頭にかぶっている私のスカーフの赤茶色と同化してしまいそうなほどに、真っ赤だった。

ひよっとすると、相手を慰めるとか、そういうことには慣れていないのかもしれない。

魔王なりの厚意が嬉しくて、胸の辺りがぼっと温かくなるのを感じる。

「……魔王」

呼ぶと、魔王は新底驚いたような顔で私を見た。

私も自分で言っただけ驚いたよ。だって初めて呼んだもんね。うわ、そう考えると何か変に照れてきた。

「ありがとう」

この世界に来て、ちゃんと笑ったのは初めてかもしれない。

作り笑いでもなく、愛想笑いでもなく、自然と生まれた笑顔でお礼を告げた。が、魔王は切れ長の瞳を見開き、次いでフイと私から視線を逸らしてしまった。

な、なんだ！？ そんなに私の天使のような微笑は視界に入れたくないほど不快だったか！？

「……………くだらねーこと言っただけでさっさと行くぞ、並み顔女」

言いながら、魔王は麻袋を担いでいるのとは反対の肩に私を持ち上げ、俵担ぎにする。その際チラリと、彼の耳が朱に染まっているのが見えた。

あ。なんだ、照れてるだけか。

見かけによらず可愛いところあるんだなあ。

私が笑いを噛み殺していると、魔王は私の腰に手を回し、照れ隠しか、乱暴に肩へ抱え直した。

正直体を触られるのはこっぴどく恥ずかしいものがあるけれど、

エネシア  
生気を

吸われて力が入らないから仕方がない。大人しく心身共に米俵に成り切って、魔王に担がれることにする。けど、ここでずっと気に掛かっていたことが一つ。

「あのさ。私の名前、並み顔女でもお前でもないから。美夜だから確かに私も教えてなかったんだけどさ！ けどやっぱり呼び名がお前とか、ましてや並み顔女ってのは、呼ばれる度に何だか癢に障る。私が言つと、魔王は真横にある私の顔へと視線を向けた。うわあ、そんな至近距離で見つめられると照れるわ。」

「ミヤ？」

「みや」

「ミヤ？」

「み・や！」

「ミヤ」

漸く正しい発音に辿り着き、私は笑顔で頷く。はたから見たら、どんな猫プレイかと思われるところだよこれは。

「変わった名だな」

「そりゃ異世界だもん。名前の響きが違つのは当然だよ」

ふと魔王は魔王という他に名前はないのかと尋ねようと思ったが、

近隣の建物の上へ向かって彼が跳び上がったから気が削がれてしまった。

まあ、間違った呼び名ではないし。別にいいか。

『ミヤ』

胸の内にあつたもやもやが、一気に取り払われた気がした。

人間に殺され掛けて、魔王に助けられて、元気付けられるなんて、元の世界じゃおかしな話だとは思っけれど。

私を一応は必要としてくれる者がいる。私の名前を呼んでくれる者がいる。

そう思うと、私がこの世界へやって来たことが無意味ではないと、幾分か気分が安らぐような気がした。

専用食なんていう位置づけも、まあ健全な青少年的視点から考えたら、不埒なこと極まりないだろうけど。

でも、そんな位置付けもまあ多少はいいかな、なんて思えてしまった。

キスは、当分慣れないだろうけどね。

## 閑話 金髪野郎の憂鬱

金髪野郎こと、キルベルト・アレスタンはこれまでの21年間の人生で、これほど屈辱的な経験をしたことがなかった。

昨日はラディウス全体がやたら浮き足立っていた。それもその筈。昨日は伝説上の生物である魔王が封印されて丁度100年。そして異界から一人の娘が現れると、聖教皇ヒューバートが預言をされた日であったのだ。

キルベルトはラディウスの中でもテルミオール国内、マンセン地方支局部に配属されている。

マンセン地方ははっきり言って、それ程栄えている地域というわけではない。が、その中には魔王の封印されているプロイゼンの森が含まれ、当然の如く警戒態勢も厳重にしなければならなかった。よって昨日はマンセン地方支局部の聖術師達以外にも、支局部隊長であるキルベルトの下には本部から多数の聖術師達が派遣され、大規模な預言の娘の捜索が行われた。

プロイゼンの森には通例一般人が立ち入り出来ないよう、マンセン地方支局部の聖術師達が日毎に強力な結界を張っている。昨日も例の如く結界の張り替えを行ったのだが、その際偶然近隣の村人達が迷い込んでしまったらしい。日が暮れた後、森の中で預言の娘の捜索を行っていたキルベルト一行を見つけるなり、彼らは道に迷ったと助けを求めてきた。

もしかしたら預言の娘は既にこの世界へ現れており、何か行動を起こしているかもしれないと焦燥感に駆られていたキルベルトは、正

直彼らの存在は煩わしく感じた。だが、プロイゼンの森には魔物も出現する。加えて今日は預言の日だ。何が起こるか分かったものじゃない。仕方なくキルベルトは村人達の同行を許可した。

そうして他の聖術師達と合流し、村人達を送り届けるよう頼もうと部下達と相談していたその時、村人の一人が預言の娘が現れたと声を上げた。

預言の娘は……何というか、予想に反して、少しばかり落ち着きがないのと風変わりな衣服を身に着けている以外は、一見するとどこにでもいるようなごく普通の娘だった。

しかし世界を破滅に導くという、かつての聖教皇の預言は絶対だ。彼女はすぐにでも処刑しなければならぬ。

出会ったばかりの娘に、情を移す必要性もなかった。元来、キルベルトは他者との交流などに無関心な人間だ。他人に理解されなくとも、聖術師としての職務を全う出来ればそれでいい。それがキルベルトのモットーであった。

しかし、結果的に逃げられた。魔王の封印を解くという、最悪の置き土産を残して。

プロイゼンの森には多数の聖術師が収集されていた為、幸いキルベルト一人に責任は問われなかったが、彼の心には十分に深い打撃を与えた。

加えて今日の昼間の出来事。

昨夜の失態を打開すべく、キルベルトは自身の管轄地域であり、プロイゼンの森からほど近い街ハルディアに数人の部下を連れ、魔王と預言の娘の捜索を続けていた。

自分の運気は尽きていなくなったらしく、娘は確かに目の前に現れた。

が、やはりその結果、

「また逃げられたんだって？」

冷え冷えとしたラディウス、マンセン地方支局の回廊を歩くキルベルトの背中に、跳ねるような明るい声が投げ掛けられた。

またこいつかと内心嘆息しつつ、キルベルトはちらりと首だけ擡げて背後を振り返る。

「カイン、何の用だ」

「相変わらず無愛想だなあ。それが親友に対する態度なわけ？」

「いつ私が貴様と親友になった」

「またまたあゝ、照れちゃって」

キルベルトの冷たい態度など気にも留めない様子で、彼の同僚であるカイン・レッドフォードは華やかな笑みを湛えながら彼の隣へ歩み寄る。

同僚とは言っても、カインは幼い頃、修道院で聖術師としての修行を施されていた時からの知り合い　言うなれば幼馴染だ。

ピーコックグリーンの癖毛に、ハニーブラウンの垂れ目の、女性受けは良いらしい容姿で、性格も聖職者としては不道理なこと極まらない、軽薄で、好色な男だ。

生来生真面目な性格で女性はおるか、他人にも興味のないキルベルトにとって、カインは到底理解しがたい人種だった。

月明かりに照らされた、白く磨き上げられた回路を並んで歩き出す。

「誰に聞いた」

「？ 何を？」

わざとらしく小首を傾げて、逆に尋ね返すカイン。こいつの確信的な、他人をからかうような態度が何とも気に食わない。

「今日のハルディアでのことだ。何故貴様が知っている？ 貴様は今日は支局部待機だっただろう」

カインはキルベルトが指揮を執るマンセン地方支局部の副部隊長ではあるが、今日は魔王や娘に関する上層部への報告や資料の整理などの事務作業を、キルベルト自身が確かに頼んだはず。

「そんなのとつくにここの内部で噂が広まってるよ。 部隊長殿は魔王との一騎打ちで気絶する程こてんぱんにのされた拳句、娘にもまた逃げられた って」

酷い言いようだ。しかし、間違っではない。

屈辱と羞恥と不甲斐なさで、我知らず教本を持つ手に力が籠る。

「業績優秀のお前がへマするなんてめずらしーよな。そんなに強かったのか？」 魔王 ” ってやつは「

カインの問いに、昼間の出来事を思い出す。

小高い住居から両脚で落下したにも関わらず、無傷でいられた身体の頑丈さ、自分の攻撃を難なく避けたあの身のこなし、スピード、自分を一発で仕留めた攻撃力。

「……………つよ……………かった」

思索した後発した声は、自分でも驚くほどか細く、頼りなげだった。自分で口に出すと、改めて言葉を噛み締めているような気分になり、余計にキルベルト自身に敗北感を植え付けた。

魔王は、強かった。

物心付く頃から対魔物用聖魔術の英才教育を、それはもう血反吐を吐く思いで学んできたキルベルトよりも、魔王は遥かに強かった。

キルベルトはテルミオール王国の隣国であり、ラディウスの本部が置かれているガルヘルム帝国のとある街で生まれた。

聖術師の輩出が豊富なアレスタン伯爵家の出自で、尊敬する祖先や父、兄達に続いて当然の如く彼も聖術師への道を歩んだ。

また建国の祖であり、魔王討伐の際にも勇者と共に戦った聖教皇、ヒューバートの部下の術師もアレスタン家の出身で、キルベルトは今も昔も、それを誇りに思っていた。

彼自身も聖術師としての才能は突出しており、現にその才能を買わ

れ、21歳という若さながら他国ではあるものの、広範囲の地域の支局部隊長という大役を任されている。

とにかく、そんな恵まれた出自、才能、現状を持つキルベルトが、憎むべき魔物の長にいと簡単に打ち負かされ、罪人である娘を二度も逃がすという行為はただただ屈辱的で、はがゆい結果であった。

「……キルベルト？　どーした？」

怪訝な色を含ませるカインの声に、我に返った。  
なんでもないと答え、小さく息を吐き出す。

「……次こそは」

我知らず口に出た言葉はカインの耳に届かなかっただらしく、彼は暢気に鼻歌なんて歌いながら隣を歩いている。  
ザワザワと、中庭の木々が夜風に凪ぐ音が聞こえる。冷たい夜風が、ゴールドブロンドの髪を掬い取った。

次こそは、奴らを捕らえてやる。

心の中で再び呟くと、キルベルトは窓から覗く、丸くて白い月を見

上げた。

## 14 とある魔物たちの世間話

『おい、アノ噂きいたか』

『きいたぞきいたぞ。魔王ノ野郎がふつかつしたって話ダロウ』

『ああ。ナンでもフウインを解くノに手を貸させたニンゲンのオンナを専用の食糧としてかかえこんでるらしい。くわえてエリオラの量も質も、100ネン前とは比べモノにならないほど落ちテイるときいたぞ』

『ナルホドな。魔王の座ヲうばうには絶好ノきかいたことか』

『ああ。100ネン前は好きほうだいやられタからナ。ニンゲンのオンナなんて連れテイル野郎なんざ、モハヤ敵じゃナイ』

『そつと決まれば事は早くオこなねバ』

『そうだな。今ごろ、我ラのようにナ反魔王派であったヤツらもまた、行動しはじめていル』



## 15 魔物界は弱肉強食

どうしてこうなった。

魔王の後ろの木の更に背後に隠れながら、私は心の中で嘆く。

辺りに充満するのは鋭い血臭。周囲の木々には、朝の良好な視界で見るとは刺激的過ぎるほどの赤が飛び散っている。

そしてこちらに背を向けている魔王の前方には1体の巨大な魔物が、行く手を塞ぐようにして倒れ伏していた。

\* \* \*

遡ること数分前。

一晩明けて、私と魔王は彼の仲間がいるというバリオス山を目指して森の中を進んでいた。

私の身を包むのは、昨日魔王が買ってきてくれた真新しい服。

ショートパンツに綿のような生地 of 長袖のトップスで、おとこの夜に血や泥で汚れに汚れまくった制服とは比べものにならないほど着心地がいい。デザインは民族衣装風で、日系顔の私が着るとどうにもコスプレ臭さは拭えないけれど、服自体は予想外にかわいかった。驚くことにサイズもピッタリだ。

加えて今朝魔王が起きる前に着替えついでに近くの川で体も洗った

から、身も心もさっぱり。お風呂は心の洗濯場なんて言うけど、あれは本当だね、うん。

気分が良くて自然と鼻歌なんて口ずさんじゃう。ふんふんふん。

昨日までに反して異様に軽い私の足取りとテンションに、隣を歩く魔王は怪訝そうな顔をしていたけど、そんなことは気にしない。

魔王のお陰でもややもやしていた気分もそれなりに晴れ、これ以上今の状況を嘆いたってしょうがないことがわかった。泣いたって深く考えたって今自分がこの異世界セリナー ज्याにいることには変わらないんだし、元の世界に帰れるわけでもない。

いざとなったら魔王が守ってくれるし（たぶん）、ネガティブに考えても余計気が滅入るだけだろう。

だったらせつかくの異世界トリップ。どうせなら大いに冒険してやろうという気になった。

いつか元の世界に帰った時、伝記を残してやるくらいの勢いで。

兎にも角にもプラス思考をモットーに、今を生きようという結論に落ち着いたわけだ。

この世界ではちょっとやさつことではびくつかない、図太い神経を持ってないとやってけないだろうしね。うん。

そんなこんなで前向きな気分です歩を進めていたんだけど、突然私達の前に1体の明らかに人間じゃない生き物が現れた。っていうか、魔物。間違いなく魔物。ひえええええっ！

日の出ているうちに魔王以外の魔物を見るのは初めてな私は、言っている傍から動揺してフリーズしてしまっわけ。とりあえず気を落ち着かせようと、魔物の容貌を観察してみた。

魔物は一言で言うとブタゴリラ……みたいな。全身どす黒い紫色を

していた。

凶体は魔王より一回りくらい大きくて、ゴリゴリの筋肉隆々。パツと見細マツチヨな魔王なんて両手で掴んで捻りつぶしてしまえそうだ。

そうやって観察していると、ブタゴリラ魔物が確か……こう言った。

『 魔王の座は俺様が頂く！ 』

って。

その後は魔物がこっちに向かって飛び掛ってきて、私は慌てて後方の木の背後に隠れたのだ。

\* \* \*

そうして今に至る、と。

嗚呼もう。

折角プラス思考するんるん気分で森林浴を満喫していたのに。今となつては乱れた思考と血生臭さのせいで、花の匂いもマイナスイオンも感じ取れないよまつたく。

魔王は片手に付いた魔物の血を振り払うと、こそこそと様子を覗き見ている私を振り返った。が、目が合うとまたすぐに再び倒れる魔物へと視線を戻してしまった。

？ なんだか、こつちを見る目つきがやたら険しかったような……。一人すかさず逃げたのがそんなにムカついたか？ いやだって私がいたって邪魔になるだけだし、あんな凶悪な顔のブタゴリラ見たらどんな神経凶太い女子高生だって逃げちゃうって。

まあこうして隠れていてもしょうがないか。

私は木から離れ恐る恐る魔王の傍へ歩み寄る。

「うつおおお！？」

思わず色気の欠片もない悲鳴が、我が口から飛び出した。

だって死んでると思ってた目の前のブタゴリラ魔物に、まだ息があったから。

「お前……、もっと愛嬌のある悲鳴出ねーのかよ」

「う、うるさいなあ！ それより、こいつまだ生きてるじゃん」

魔王の呆れたような言い草に憤りつつも、私は目の前に岩のように倒れるブタゴリラ魔物を指差した。浅黒い紫色の背中は、確かに上を下している。

「ああ、生かしておいた。訊きたいことがあるからな」

「訊きたいこと……？」

襲い掛かってくるときに言っていた、『魔王の座』……がどうのこうのって、アレのことかな。

この魔物は魔王と戦って彼の地位を奪おうとしたのだろうか。って  
いうか、そもそもそんな単純に王の地位って奪えるもんなの？

私が考えていると魔王は徐にその場へ屈み込み、片手でブタゴリラ  
の巨大なブタっ鼻をガツと鷲掴みにした。

『ッ……うウ……』

「おいこらでかつパナ。この自慢の鼻失いたくなくなったら正直に俺  
様の質問に答える。……どこまで知っている？」

『ドコまで……と、言えますト……？』

人間には到底出せないような、おぞましい声で尋ね返したブタゴリ  
ラに魔王は顔を顰めると、ブタっ鼻を捻り上げた。そりやもう粘土  
を引きちぎるように、鼻がぶちっ取れてしまいそうな勢いで。

『ひギイイツ!?!』

「俺様に余計な説明をさせるな。お前が知っているとこまで全部だ、  
全部」

しゃがんだ膝に空いている片手で肘を突きながら顎を手で支え、苛  
立った様子で言う魔王。

何だかブタゴリラが気の毒に思えてきたよ私。

『す、すびばせん……。……。おれが知ってイれることは、魔王さまのフウインが最近に解け、ソレに手を貸させたニンゲンのオンナを連れていれること。そして魔王さまのもつエリオラの質モ量モ、フウインさねル前とは比べモノにならないほど落ちテイれること。……。ソレだけです』

「本当にそれで全部だな？」

『はヒ……。少なくとも、コノ近辺のマモノたちにはほとんど知レ渡つてイれるかト……。』

「……………フン」

憎憎しげで、且つ高圧的に息を漏らすと、魔王はブタゴリラ魔物の鼻を解放し、立ち上がった。支えを失った魔物は再び地面へ上体を倒れ伏せさせる。

「これに懲りたら、二度と俺様から地位を奪おうなんざ考えねーことだな」

そう吐き捨て、スタスタと歩き出す魔王。

おや、ブタゴリラにトドメは刺さないのか。

意外に思いつつも置いていかれたらたまらないので、後方を振り返りながら私は慌てて魔王の後を追う。

「ねえ」

「あ？」

前を向いたまま、ジロリと横目で私を見やる魔王。  
もう少し柔らかな対応は出来ないのかなあこいつは。

「あんたって魔物の王なんでしょ？」

「ああ。いかにもそうだが」

「それってどういう仕組みで決まってるの？ さっき魔王の座とか、地位を奪うとか、なんかいろいろ言ってたけどさ。戦って奪うとか、人間じゃそういうこと考えられないなあって思って」

こっちの世界ではどうかわからないけど。

少なくとも元の世界では世襲制が基本で、王や天皇になれるのはそういう血筋を持った人ばかりだ。

暗殺して継承権を奪うとかはあったかもしれないけど。でも、地位の低い、全くの赤の他人が武力行使で国のトップになることはたぶん出来なかったはずだ。

「マモノは血筋や生まれながらの地位にこだわるニンゲンとは違う。ただ、強いものが頂点に立つんだ」

「はああ、なるほどー」

マモノ全体の中で、一番強いのが、王。

聞いている分には単純明快だけれど、でも……

「それってなんか逆にややこしくない？」

「どづいうことだ？」

「だってさ、見る限り魔物にも色んな種がたつくさんいるでしょ？  
魔王みたいに人間に近い姿をしたのや、さっきのブタゴリラみたいな  
のまで。そんな中で一番強いヤツって、なかなか決まり辛いん  
じゃないかな」

地球で人間以外の生物の中で、強さNo.1を決めるのと同じくら  
い。

だって個々の体格や知能はそれぞれ違うんだよ？ 人間と違って魔  
物ごとに国が存在しているようにも思えないし、絶対そんなの収拾  
つかないって。

そう考え、隣の魔王を見上げると、さも意外そうな顔をして彼は私  
を見下ろしていた。

「……お前、見た目頭悪そーなのに意外と考えてんだな」

「！ しつつれいだな！ これでも結構物事は理屈的に考える主義  
なんですー」

たしかに後先考えず行動するやつとか、本能的に生きてそうだから  
言われることがしょっちゅうだけどさ。

頭悪そうは少しばかり力チンときたぞコラ。

魔王の物言いに口を尖らせる私を他所に、彼は前を見据えたまま説  
明し出した。

「……たしかに俺達マモノはニンゲンと違って国家を持たねーし、

ニンゲンより寿命が長いこともあって個体の数も膨大だ。けど、あの程度の集団はある」

「集団？」

「ああ。マモノだって子を成すからな。同じ個体の一族が、固まって暮らしているケースも少なくねーんだ。んで、その中から一番強いヤツと、また別の集団でのトップが争えば……」

「大分数が絞り込めるんだ」

「そういうこと」

ん？ でも待てよ？

「でもさ、仮に今魔王であるあんたが殺されちゃって、あんたを倒したヤツが新しい魔王になったり、そういう嘘を吐いてあんたを倒してない魔物が魔王のフリをしても、他の魔物達はわかんないんじゃないの？」

「いいや、わかる」

そう言うと、魔王は歩を止め、徐に額に掛かった前髪を除けた。

……刺青……？

のように、見えた。

陶器のように青白い彼の額には、赤紫色の不思議な紋様が走っていた。一見すると刺青のように見えるそれは、よくよく凝視すると皮膚に浮き出た痣だということが分かる。

「なに？ これ」

「魔王を倒し、その血肉を喰らうと現れる」 王の証 ”だ”  
「んなっ……!?!」

思わず声がひっくり返った。

いやだって血肉って！ 喰らうって!!

倒しただけでなく、その身もおいしゅうございますしないと王になれないってことでしょ!?! なんて鬼畜な習わしなんだよ。おええ。

「あ、あんたも前の魔王を倒して、そいつの肉を食べたの……?」

恐る恐る尋ねると、目の前の魔王は僅かに顔をしかめた。

らしくない、陰の掛かった表情だった。

何ていうか…… 機嫌を損ねたというより、訊かれたくないことを訊かれて返答に困っているような、そんな顔だ。

何かいけないことでも訊いたかな？

少しばかり不安になる。

よほど前の魔王のお肉が不味かったのだろうか。思い出して今にも吐き出しそうになったとか……!

しかし数秒の間後、「まあな」と返事が返ってきたため、私の危惧も取り越し苦労に終わる。

「もうこの話はいいだろ。只でさえさっきのでかっパナ野郎のせいで、時間食わされてんだ」

そう言うと魔王はさっさと歩き出してしまった。

「ちよつ、待ってよ！ 歩くの早いつてば」

「お前の足が短いんだろ」

「なっ……、なんですすって!?!」

置いて行かれないよう早足で歩きながら、隣の魔王を睨み付ける。さっきの陰のある表情と違い、彼は意地悪な笑みを浮かべていた。そんな彼の様子に何故か安堵してる自分がある。

ほんと、なんだったんだろっさっきのは。

いつつも強気な彼にあんな顔されると、変に調子が狂ってしまう。

なんていうか……怖いものなんて何にもないぜ！ ってヤツの代表格みたいな男だから。彼が暗い顔をしていると、何だかこちらの気分も沈んでしまう。

前の魔王を倒したときに、何かあったのかな……。

ぼんやりとそう思う。

いや、何も無かったわけがないだろう。何てったって魔王だし。肉を食すだし。

魔王にも魔王なりに、過去に色々あった筈だ。

けど、なんとなくこれ以上は訊いてはいけない気がした。

誰だって踏み込まれたくないところはあるしね。私もそうだし。  
プライバシーの侵害は不法行為ですよ。

そんな事を考えつつ、時たま魔王と憎まれ口の叩き合いをしつつ歩いてみると、程無くして私達は森を抜けた。

## 16 見て見ぬフリ

「あれがバリオス山？」

「ああ」

森を抜けた先にまず見えたのは、どこまでも続く巨大な山脈だった。魔王の部下が暮らしているなんて言うものだから、てっきり枯れ木しか生えていない、灰色掛かった魔の山って感じのものを想像していたけれど。

うん、一見する限り、ごくごく普通の山だ。緑色に生い茂った木々が密集した山々が幾重にも重なって、辺りの街道を高めから見下ろしている。

たっかいなあゝ……。

思わず溜息が漏れる。勿論これは自然の雄大さに対する感動なんかじゃなくて、これからこの山に突入するのかという嘆きの溜息ね。だつてさあ……森抜けたばっかだよ？ 長時間のハイキングに、私のか弱い脚はもうパンパンです。この上歩きにくいつたらない山道なんて……溜息も出るってもんよ。

けれど魔王がさっさと歩き出してしまったため、私も仕方なく歩を踏み出す。休憩はナシですか、そうですか。

歩きながらちらりと横目をやると、汗一つ掻いていない整った横顔。外見は人間に近くはあるけれど、魔王は人間とは違う、魔物なのだ。

この程度のウォーキングなんて屁でもないのだろう。

ちくしょう。こちらら汗ぐっしょくしょだって言うのに、涼しい顔しやがって！

思わず舌打ちしそうになるのを振り切るように、私は前方へと視線を向ける。

森を抜けたといってもハルディアの街の方とは違って、この辺りはきちんとした道の整備は行われていないようだ。森ほど鬱蒼としていなければ、平原ほど閑散としていない。最低限の交通用に、林を切り開いた街道を施されているだけといった感じだった。

「？　ねえ、あれなに？」

徐々に山が近付いてきたなあ、なんて思っていた頃、街道の突き当たりは何やら巨大な門のようなものが見えた。

ハルディアの街へ入る関所にも、似たような木製の巨大な扉があった気がする。

「こんな辺境だし、たぶん村なんじゃねーか？　昔は無かったと思うが……俺が封印されていた間に、新しく出来たんだろーな」

「へえ……村かぁ……」

遠方に見える扉を下から上へと眺め、空を見上げる。

山に入る前にあそこで少し休憩とかできないかな。疲れたし。お腹も減ったし　って、

そこまで考えた所で、私は息を呑んだ。

「!?!?　ちょ、ちょっと！　何かあの村の方から煙上がってない!?!」

空を見上げるまで、全然気付かなかった。

巨大な扉を備え付けた門の向こうから、いくつものか細い暗黒色の煙が、踊るように真っ青な空へ向かって立ち上っていた。

\* \* \*

村の中は、それはもう酷い有様だった。

煉瓦造りの屋根は所々剥がれ、地面へと散らばり、建造物の窓ガラスはあちこち割れている。煉瓦や木、粘土で造られた家々は火災が起こったのか、所々煤だらけになり、上空へと煙を立ち上らせていた。

ハルディアの建造物と比べると、規模の小さい建物が両脇に連なつた道を歩きながら、周囲を見回す。

大規模な火事か何かかと思っただけど、この様子じゃ違っつぽいな。  
それに……

あちこちに在る、砂地の地面に染み込んだ様子の赤黒い染みが気になつた。

「これ……血かな……？」

「だろうな」

念のため取っておいた私のスカーフを被った魔王の答えに、私はぶるりと身震いする。

「大方ニンゲンの盗賊か、そこらのマモノに襲撃されただろ。よくある話だ」

さらりと言ってくれちゃう魔王だけれど、私にとってはよくある話で片付けられる状況じゃない。

だって家からまだ煙が上がっている事を考えると、少なくとも結構最近に、この街で何らかの争いが起こり、誰かがこの場所で傷を負ったということは確実だし、身近にこんな争いの跡を目にするなんて、これまでの平凡な人生を歩んできた私には考えられないことだ。

それにしても、この村の人たちはどこへ行ったんだろう……？

この村が何だか不穏な空気を醸し出しているのは、荒らされたこの惨状のせいだけじゃない。

さっきからこの村をうろついているけれど、人っ子一人出会わないのだ。

こう言っちゃなんだけど……辺りに散っている血の量の割には、死体も見当たらないし

「って、ちょ、魔王!？」

突然魔王が私の手首を掴んだかと思うと、ずんずん歩き出した。

あまりの早歩きに足が付いて行かない。っていうか、歩くのが早いんじゃないかって、魔王の足が長いんだよ！前に私の足が短いつて嫌味言ってきたくらいなんだから、そこんとこ考慮してほしいわ全く。

逸れ気味の思考を巡らせる私に、魔王が顔だけ僅かにこちらを振り返る。

「この村の様子は分かったし、もういいだろう。寄り道は終わりだ。さっさと山へ向かうぞ」

「そ、そんないきなり！まだこの村の人の安否はわかんないし、もしケガ人とかいたら」

ピタリと、魔王の足が止まった。釣られて私も立ち止まる。急いだり急に止まったり、さっきから何なんだ。

「ケガ人がいたら、どうするんだ？」

「どうするって……そりゃ手当てして、ちゃんとした医者とか、こ  
ういう暴力的な犯罪を管理する人とか呼ぶんだよ。こんな被害があ  
からさまな状況、放っておけるわけないでしょ」

「逆に俺達が捕まってもか？」

……私達が捕まっても？

私の手首を掴んだまま、私を見下ろしながら言う魔王の言葉を反芻  
する。

「この世界では基本的に盗賊とか、そういうニンゲン絡みのいざこ  
ざは騎士や傭兵が、マモノ絡みの事は術師のヤロー共が主に請け負  
っている」

ドキリ、と自らの心臓が跳ね上がるのを感じる。

魔王もそんな私の様子に気付いたらしく、僅かに紅く整った双眸を  
細めた。

「そつだ。あの金髪達の集団だよ。この荒れた村の原因がニンゲン  
だろうとマモノだろうと、こうして襲撃者の証言をする者がいない

限り、遅かれ早かれヤツらが来る。呼ぶなんてもつてのほかだ。ヤツらが何人であるかなんて分かったもんじゃねーし、この村からとつと去るのが、俺達にとつちや得策なんだよ」

「……」

返す言葉が無い。

魔王の言うとおりだ。

いずれこの村へはあの白装束集団がやって来る。元より私と魔王は逃亡者だ。このままここへ駐在していれば、下手したらこの惨状の原因を、私達へ向けられることだって有り得る。

ただでさえ追っかけ回される身なのに、加えて冤罪なんて……勘弁だ。

けど、このまま見て見ぬフリをして、この村を去るのは何とも気分が悪かった。

だって元の世界で言ったら、目の前で交通事故があつて明らかにフロントガラスや辺りに血が散つていて、被害は甚大なのに、自分が指名手配犯だから警察を呼びたくなくて、見て見ぬフリをするのと同じことだ。

もどかしくて、思わず唇を噛み締める。

「……でも、逃げたくない」

漸く口を開いた私に、魔王は僅かに瞠目した。

「だってもう少し探せば、生きてるけどケガをしてて、動けないだけの人とか、見つかるかもしれないだよ？ それなのに私が金髪野郎達にびくついたせいで、そのチャンスを逃すなんて……悔しいよ」

「……けどそのせいで、お前が処刑されるかもしれないんだぞ？ お前とこの村のニンゲンが面識があるワケでもねーし、そこまで赤の他人の身を案ずる必要もないだろーが」

もつともだ。

私だってそりゃ死ぬのなんて御免だし、この村の人達のことなんて何にも知らない。けど……

「見て見ぬフリなんて、嫌だもん」

真っ直ぐ、魔王の目を見て言った。

偽善だとか、勝手なエゴだとか、言いたければ何とでも言えばいいけど、やっぱり自分の身を案じるだけ案じて、スタコラ逃げるなんてやっぱり出来ないのだ。

見て見ぬフリをされる辛さは　自分がよく知っているから。

「それに、いざとなったら魔王が守ってくれるでしょ？」

尋ね、決して逸らすもんかと、しっかりと魔王の紅い瞳を見つめ続

ける。

数秒の沈黙の後、先に視線を逸らしたのは魔王だった。

彼は困ったように頭を掻いた後、小さく溜息を吐いた。

「あークソ……わかったよ。もう少しだけ、村の中を見てみよう」

「ほんとツ？」

「ああ」

魔王が私の言い分をちゃんと訊き入れてくれたと分かると嬉しくて、思わず笑みが零れる。

「……お前ってほんとヘンなやつ」

「！ヘンなやつってどういう」

「ただし」

魔王の突然発した声に、言い掛けた私の抗議は掻き消された。  
なんだよー、私のどこがヘンなやつなんだよー。……ん？

「俺の傍から離れるな。まだこの村を襲ったヤツらが、この辺にいるかもしれないね　　っておい！……クソツ、言ってる傍から……」

魔王が何か言っていたが、まあ探索のお許しは出たことだし、それほど気にすることもないだろう。

魔王の話の最中に、家の陰で動く、私の大好きなアレが見えた気がしたから。もし本当にアレだったら、放っておくわけにはいかない。だってまだ近くにこの村を襲った奴らがいるかもしれないしね。彼が一瞬私から目を離れた隙に、私は家々の間の生活用通路へと駆け出した。旺盛な好奇心は私のステータスです、はい。薄暗い人一人通れるのがやっとの空間を、私は走る。もう少しおデブだったらつかえてたところだな、危ない危ない。

通路を抜け出した後、私は周囲を見回した。

どうやらここは、家の裏庭的スペースのようだった。ってというかこの村、半分はほとんど山と接してるんだ。少し視線を上へずらせば、山の斜面が見える。

そうやって視線を巡らせていると、視界の端に動くチョコレート色の塊が見えた。

よかった、逃げられてなかったみたいだ。

……見間違いかもしれないけど、アレとは限らないけど。

逃げられないようにそーっと、そーっと………覚悟ッ！

思い切って身体ごと、アレと思しものへ方向転換し、その正体を視界へしっかりと捉えた。

………かつ





16 見て見ぬフリ(後書き)

シリアスにしようとするど、どうしても変な方向へ走っちゃう……。

作者の悪い癖です(汗)

17 またもや変態出現

頬に感じる、ぬめりを帯びた生温かい感触。

んふふ、くすぐったいなあ。あのわんこがお目覚めのペロペロをしてくれているのかな？ うほおっ、そんな何回も舐めたら顔が涎だらけになっちゃうでしょー。はいはい、今起きます。起きますよ〜と。

横を向いていた身体をのっそりと反転させ、瞼を開く。

そこにいたのはわんこでもにゃんこでもなく、寝転がる私を組み敷いて見下ろす、魔王ほどではないけど、やけに顔の整った男の子だった。

月光を思わせる淡い青色の髪に、満月をそのまま埋め込んだような黄金色の鋭い瞳。だらしなく半ば開いた口の端からは、牙のような鋭い犬歯が覗いている。そこから真っ赤な舌が現れたかと思うと、徐々に顔が接近して

思考覚醒&危機察知。

「ぎゃあああああああッ!?!」

「づいほッ!?!」

本能のまま目の前の少年に膝蹴りを繰り出し、彼の下から慌てて這い出ると、服の袖で全力で頬を拭う。

ぐあああああ何しやがんでええええッ！ 私の頬をさつきまで舐めてたのは、目の前でお腹を押さえながら蹲ってる変態ヤローだなっ！？ てかどうしてんなことしてたんだ！？ 私の顔なんてペロペロしても美味しいダシなんか出ませんか！？ むしろ長時間のウォーキングで汗大量に掻いたから、はつきり言っしてしょっぱいと極まりないと思いますか！？

「お、おい、ガルムが蹴り飛ばされたぞ！」

「あの娘……命が惜しくないのか」

うあああ消える消える！ 唾液と共にあのぬめつとした感触の記憶ごと消える　　って、んん？ 何だか周りがやけに騒がしいな。どよめいている様子の空気に、周囲を確認しようとして首を擡げ掛けると、目の前で蹲っていた少年がお腹を抑えながらゆっくりと起き上がるのが見えた。

「……………ゲホッ……………活きが良いじゃねーか、女。油断してたぜ」

……………ええと、

………ここはコスプレ会場か何かデスカ？

まず出てきた感想はそれだった。

いやだって目の前の少年含めて4、50人はいるだろう私の周りを囲むようにして傍観している人達がみんな、揃いも揃って犬耳とふさふさの尻尾を付けているものだから。老若男女問わずなのが何とも奇妙な感じがする。

あ、ちなみに大の犬好きである私ですが、犬のコスプレをした人には興味ありません。犬耳萌え〜とはなりません。その辺の境界ははつきりしていますよ、ハイ。

そうして周囲へ視線をくばせた所、私は今、洞窟のような場所にいるらしいことが分かった。

何処からか入り込んでいる日の光に照らされ、ごつごつした岩肌が見える。岩石特有の冷たさが、お尻に吸い付いて痛い。

目の前の少年へ視線を戻す。

「………そりゃどーも。活動的なことだけが取り柄なんで」

頬をこしこしする手は決して休めずに、敵意むきだしに言う。ちょっとくらい顔が良くなったって、ほっぺペロペロするコスプレ変態ヤローになんて心は許さんぞー！ シャーッ！



起こった。

ちよちよちよちよ、ちよつと待て！ 勝手に盛り上がってないで！  
突っ込み所が多すぎるよ！

思考回路をフル回転させてあたふたしている私を余所に、目の前の少年はこちらへ歩み寄り、私の腕を掴んで無理矢理引き立たせてくる。

「んじゃあ夜まで村のニンゲン達と一緒に、牢に入ってもらおうか」

私の腕を掴む力は、魔王に負けず劣らず強い。その指の先には、人間のものとは思えない程鋭く、長い爪が備わっていた。  
嗚呼、さっきの既視感デジャヴの理由が分かったよ。

コスプレ集団でもなんでもない。こいつら、人間じゃないんだ。  
魔物なんだ。

「……あの村を襲ったのもあんた達だったんだね」  
「？ ああ。食糧に若い女やガキを攫うためにな。今日もとり逃しがねーかもう一度山を降りてみたらアンタがいたから、ウチの巣穴のガキを囮に使うて同じように攫って来たってワケだ」  
「ガキ……？」

あの村で犬耳なんて生えた子供と会ったっけ？

首を傾げる私を見て、少年は僅かに眉を歪めた。爪が腕にめり込まんばかりに強く握られ、身体を引き寄せられる。

「アンタ……まさかオレ達のこと知らねーのか？」

知らない。知るわけがない。

てかこの世界に来てから、何か男と至近距離で会話する機会多いなあ……。愛もトキメキもないけどね。

沈黙を肯定と取っいたらしく、少年は驚いたように目を見開いた。

「……マジかよ。オレ達の種は世界中にわりと繁殖してる方だぜ？ アンタ、よっぽどの箱入り娘なんだな。……まア、大事に育てられただろうアンタも、どっちにしる夜には喰っちまうんだけど？」

そう言うと、少年は黄金色の瞳を細め、意地の悪い笑みを浮かべた。

言葉のニュアンス的にも、魔王のように人の生気<sup>エネンア</sup>だけを食べる……

という訳ではないのだろう。少年の口元から覗く鋭い犬歯を見ても、彼らが人をどう”食す”のか、容易に予想がつく。

けれどこれでも私はこちらの世界に来て、何度か殺されかけたことのある身。そう簡単には恐怖を顔には出しません。

極めて無表情を装い、彼を至近距離から見つめ返す。

私の顔を暫く凝視した後、少年は「つまんねーの」と面白くなさそうに視線を逸らすと、さっさと私から離れた。

「アンタ、箱入り娘だか何だか知らねーけどさ、さっきの脅し文句聞いてびびらねーなんておかしいぜ？ 普通」

「お生憎様。むしろ魔物には慣れてるから。私」

魔王という名の魔物と行動を共にしてるからね。まあ、彼は私に危害を加えようとはしないけどさ。

私の答えを聞いて、少年は一瞬ひどく驚いたように目を見開いた。が、すぐに先ほどのような他人を揶揄するかのような面持ちに戻る。

「そ。まあ、そんな口叩けるのも今のうちだけだろーけどな」

「そーだそーだ！」

「ガルトム、見せてやれ！ やってやれーッ！」

周囲のヤツら飛ばす野次が、洞窟内に木霊す。そりゃもう、ここが武道館か何かじゃないかってくらい湧き上がりよう。

この場合挑戦者は私ってか？ わんこ魔物、無知な人間からの初防衛戦！ ……なんてね。

つてうおッ！？ まぶしい！ いきなり発光するなんてガルトム少年、君は魔法少女か！？

「…………あれ？」

我が目を疑った。

突然目の前の少年の姿がまばゆい黄金色の光に包まれたかと思っただけ、一瞬の後、目の前から彼の姿が消えていた。

ま、まさか瞬間移動テレポーテーションとか!? この世界なら十分に有り得るし、そうしたらきつと周りの野次集団達に紛れ込んでいるんだな! そうして中からひょっこり現れてへへん、すごいだろーと鼻高々するつもりなんだな! そうとなる前にこっちから見つけてやる!

キョロキョロと辺りを見回す。が、それらしき少年は見当たらない。

「おい」

目の前から少年の声が聞こえた。

視界を最初の位置に戻すけれど、誰もいない。聞き間違えかな?

「ここだ」

今度は下方向から聞こえた。導かれるように、視線をやや下の方へとずらす。

「え」

この時の私は、まさに鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしていたと思う。

そこには、おそらく虎に近い大きさはあるであろう、ムーンライトブルーの豊かな毛並と黄金色の鋭い瞳を持った、犬もとい狼が、四肢で力強く佇んでいた。

「オレ達は人狼族<sup>ウェアウルフ</sup>。人型の姿にも獣型の姿にも、状況によって成り変わるんだ」

なるほどびっくり。

……………わんこじゃなくて狼だったんだね。

## 17 またもや変態出現（後書き）

新キャラ登場です。

ガルムのチャームポイントは「ウザイ」「面倒臭い」「青臭い」です。  
どうぞよろしく。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1454ba/>

---

魔王サマの専用食

2012年1月8日00時48分発行